

會津史

卷七

110  
29

館書圖京東

九	架	函	類	門
冊	號			

樂府詩集卷之七

子夜歌  
子夜吳歌  
子夜  
子夜歌

子夜歌  
子夜吳歌  
子夜  
子夜歌

會津史目次

卷七

第八編 保科氏後松平氏

第六章上 容保公の佐幕

(一) 長州赦免の議

(二) 薩長天下の政治を執る

(三) 慶喜公の下阪

(四) 伏見鳥羽の戦機

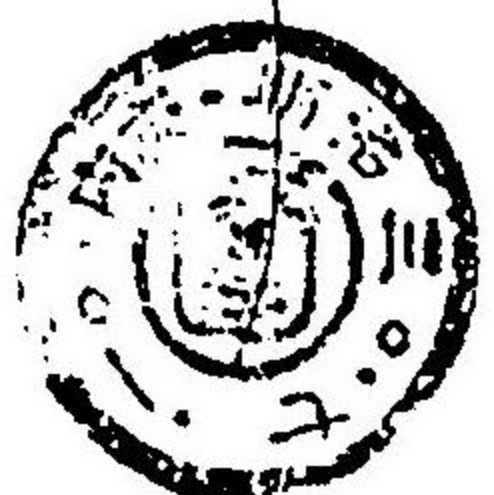
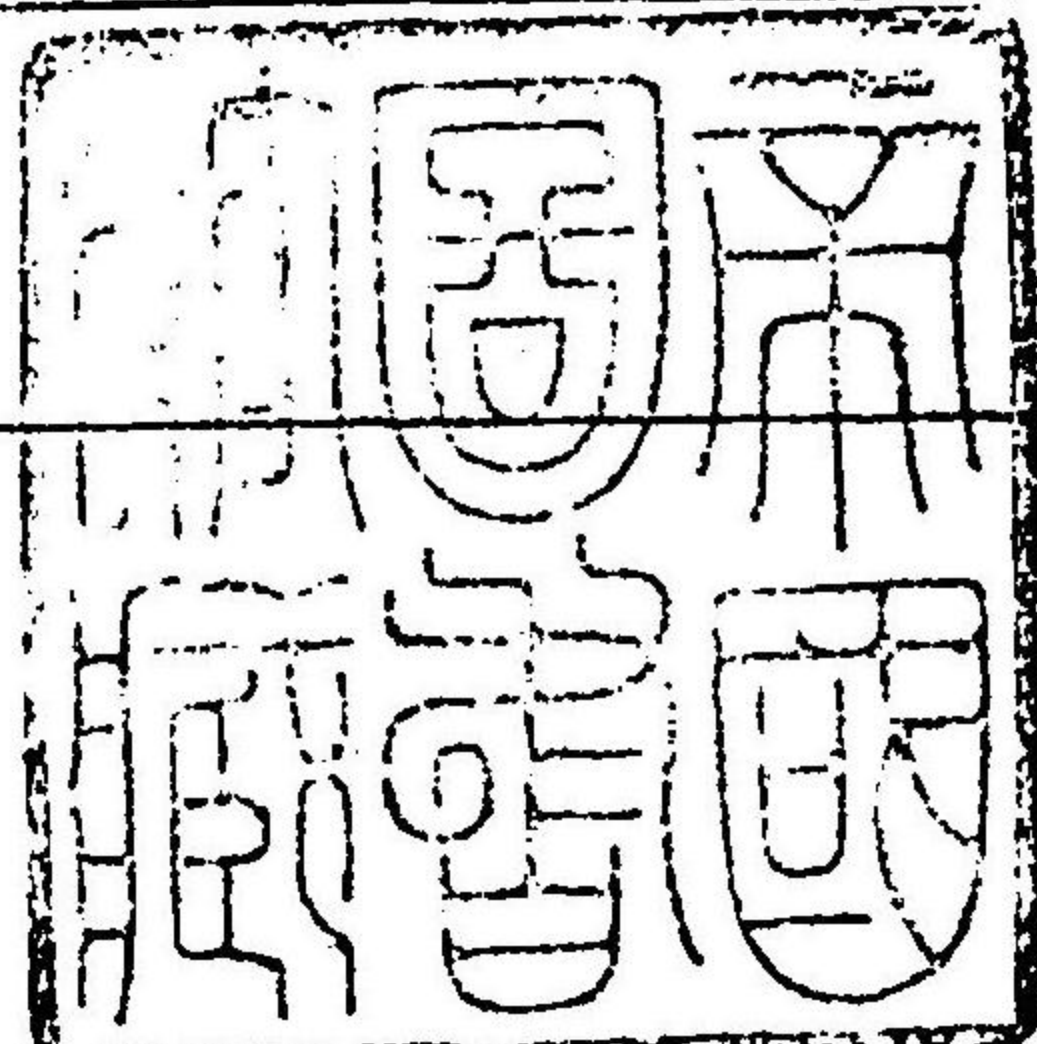
(五) 正月三日の戦

(六) 正月四日の戦

(七) 正月五日の戦

(八) 正月六日の戦

(九) 大阪城退去



(十) 徳川氏處分

(十一) 總野の戦

(十二) 奥羽同盟

會津史卷七目次終

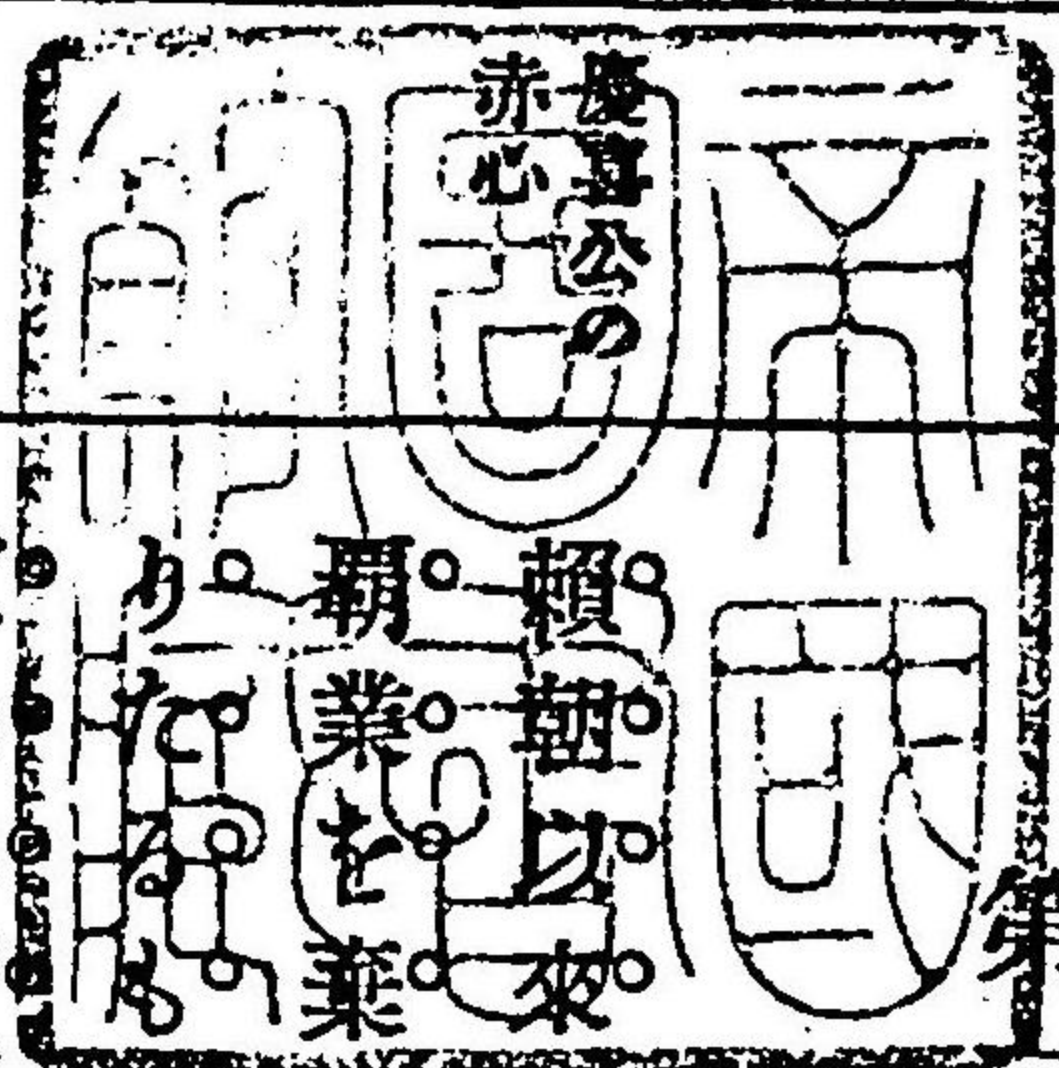
會津史 卷七

耕雨 關場忠武 閱

相城 池内儀八 著

第八章 上容保公の佐幕

(一) 長州赦免の議



賴朝以來七百年昌盛なる武門政治の因襲を打破し祖先繼承の  
覇業を棄てて、果然大權を朝廷に奉還し、新に局面を革むるに至  
りたるものは、慶喜公が時勢を察し、尊王の誠心あるに因らずん  
ば、あらず、而して容保公等と國家多事に際し、苦心經營、東奔西走  
能く施政に盡瘁せし、其功決して没すべからざるものなり、然る  
に、公不幸、將に傾かんとする徳川の後を嗣ぎ、天下人心の離れた  
る幕府に入り、朝廷の公卿、諸藩の志士のため、誅議せられたりと、

雖ども勃焉として磅礪し來れる皇運に遇ひて、大勢の赴く所に、  
從ひ徐るに將軍職を退き、以て千載一遇の好時好機に投じ、王政  
復古の基礎をなしたる其忠誠其聰明其英斷は、方世不滅の名譽  
ならずんばあらず、後に伏見鳥羽の變ありと雖ども、之れ少しも  
其名譽を傷くべきものにあらず、勢止む能はざるものありて、一  
時戰端を開きしものなり、而して其舉止動作を熟察するに、一も  
皇室に抗するの惡意あるなく、國家を恐亂するの精神なく、朝廷  
の大權を奪はんとするの心なく、實に誠意以て尊王を勵み、赤心  
以て國家の治安を謀らんと欲するより、他なきなり、當時協同一  
致の運動をなせる、容保公の意亦之に外ならず、

討幕の密  
勅

慶喜公、政權奉還の當日、即ち慶應三年十月十四日、討幕及會桑兩  
藩征討の密勅は、薩長兩藩主に下れり、嗚呼之れ何等の顛倒ぞ、會  
桑兩公討伐の勅文左の如し、但し桑名藩主松平定敬公は、京都所

司代として當時公武の協和に盡力せしものなり、

右二人、久滞在輦下、助幕府之暴、其罪不輕候、依之速加誅戮、旨被  
仰下候事、

十月十四日

忠實能  
實愛之

長門宰相殿

同 中將殿

薩摩中將殿

同 少將殿

初め薩藩の攘夷派、西郷吉之助、隆盛等は、長藩の攘夷派と合同せ  
ず、互に相疾視して、各別に討幕の運動をなしたり、之れ獨り自藩  
に於て天下の權を恣にせんと欲してなり、而して其兩藩が互に

疾視するの不利なるを悟るや、征長の役中、幕軍振はず、將士煩悶するの時に於て、兩藩同盟を締結せり、是に於て公武合躰派なりし薩士大久保市藏等も討幕派に變じ、密かは長士木戸準一郎(孝允)廣澤兵助(眞臣)山縣狂介(有朋)品川彌二郎等と共に、中山忠能、中御門經之、嵯峨實愛の諸卿に説き、朝廷に乞ふて毛利父子の官位を復し、其兵を合せて討幕討會の謀をなさんと、熱心に之が運動をなし、遂に密勅を得るに至れり、此時、之等の藩士を操縦して其策畧を授けたるものは、薩長の藩主にあらずして實に洛外嵯峨野に屏居せる元と公武合躰派なりし、岩倉具視卿なりき、當時は朝議の變動朝夕を計られず、一旦勅命ありと雖とも、世人は天皇の思召にあらざる偽勅にあらざるやを疑ふの時なり、故に長州討伐の時には特に左の如き、宸翰の勅命を下して世の疑を解かれたりき、

薩長の陰謀

一 此頃世上騒々敷由甚心痛の事に候昨年八月十八日一件關白始予の所存を矯候にては決て無之且其後申出候件々各眞實に候偽勅との風説有之由に候得共必ず心得違有之間敷事

一 親征行幸の儀甚不好候得共段々差迫言上に付實に無據大和行幸申出候得共實は意外の事に候得は延引申出候事

一 十八日一件守護職の儀故肥後守へ申付候同人忠誠の周旋深令感悅候決て私情を以致し候儀にては無之候其旨無間違可心得候事

一 長州人入京は決て不宜事と存候此儀も各無疑惑候事

而して今や未だ賊名の消えざる長人をして征討の任命あり、抑容保公は固より祖正之公の遺訓を奉して尊王を主とし、國事を憂ふるものなりと雖とも、徳川氏の懿親として如何に其幕府が失政多かりしと云へ之が矯正策を施さずして直に討幕義主を謀り、國家の騷亂を犠牲に供し、宗家の滅亡を顧みざるは、義に於てなす能はざる所之れ我公が幕府の執政の爲め屢々疾視さ

れたるに拘らず、始終苦心慘憤、公武合躰に力を勞せし所以なり、  
 始めて尊王の大義を天下に鼓吹せる、水戸藩と雖とも倒幕主義  
 にはあらず、薩長も亦初め大に公武合躰説を主張せしにあらず  
 や、而して土佐が赤心誠實大政奉還を勧めたるが如き、越前が總  
 裁として幕政を料理せしが如き、尾張が後見となり、總督となり  
 京都に周旋せしが如き、尊王の大義を執ると共に、徳川氏に誠を  
 推し、所のものなり、之と一致同躰の運動をとりし、容保公が宗  
 家の滅亡せんとするを扶持し、公武合躰に盡し、を以て、何ぞ獨  
 り之を咎めんや、然るに、薩長が公武合躰に反對し、密勅の運動を  
 なすに至りしものは、彼が幕府の衰弱意外に甚しきを見、茲に關  
 ケ原敗衄の報復心を起し、徳川氏を倒して、天下に代らんとせし  
 野心に變じたる、我公が當時先帝の殊遇を忝ふし、勢威天下に  
 震ひ、以て薩長逐鹿の野心を妨げたるに、因らずんば、あらず、而し

て大權奉還は、彼薩長討幕派が意外に出でたる處のものなり、  
 雖ども、此時未だ天下の政權全く其手裡に歸せざるを以て、彼は  
 猶討幕主義を改めず、其實行の期を窺ひたり、

斯の如く、我公が朝廷と徳川氏との間に周旋し、殊に幕威を舊に  
 回す能はざるを知るや、専ら朝廷に依頼し、王命を遵奉し、死を以  
 て國事に盡し、にも係はらず、唯徳川氏と同類と見做して、徳川  
 氏と共に陷樂せられんとするに於ては、徳川氏を扶けて共に其  
 陷落の難を防かんとするは、義としてなさざる所なり、況や密勅  
 の運動を以て、一同を千仞の谿谷に投じて、粉碎せんと謀られた  
 るに於てをや、

是に於て、我一藩薩長の陰謀のある所を知り、之れより徳川氏を  
 扶持して、彼に當りしも、淳朴なる會津風習は、誠實事を處し、剛毅  
 なる會津氣風は、曉武戰陣に適すれども、變幻窮りなき政權争奪

の權略に至りては、其能とする所にあらざるを以て、遂に彼が策に陥り、名分を失ふに至れり。後に薩長内閣の成立する異むに足らざるなり。

長兵上京運動

十月十四日、密勅の下るや、薩長藝の三藩は、兵士を軍艦數艘に乗組みしめ、前後國を發して東上せしめ、十一月三十日、攝州西宮に上陸し、次て大阪に上りたり。此時已に藝藩主淺野長勳上京し、長州兵の入京を種々の口實を設けて朝廷に周旋せり。長藩亦書を以て朝廷に哀願する所あり。是に於て、我藩士は、長州の未だ免罪とならざるに兵を以て入京すると聞き、大に其舉動を憤り、幕府及び二條關白、尹宮朝彦親王に至り、之を追返さんとを反覆切言せり。朝廷に於ては、此處置に付き、議論紛々たりしが、討幕派の嵯峨實愛卿は、密かに中山忠能、中御門經之、岩倉具視の三卿及び薩藝兩藩に謀りて、我議を斥け、長兵をして登阪命を待たしむ。又近

會藩長兵の入京を止めんとす

衛忠房、九條道孝、廣幡忠禮の諸公も、長州赦免の命を下さんとて、之を松平慶永に謀りしに、慶永色を正して曰く、天下の大事は、公議に因らんが爲め、已に諸侯を召させられたるに、獨り大事件なる長州處分を、一に公卿の獨斷にて決定せらるゝは、其當を得たるものにあらず。と然れども、慶永は薩長等の陰謀を知らざるを以て、此議に付て、會桑兩藩より諸卿に迫るとあらんには、之れ又公議を害し、會長諸藩軋轢せんと慮り、十二月五日、二條城に至り、慶喜公に告げて同意を得、平山圖書頭を以て、我士手代木直右衛門に諭し、左の如く我藩に達したり。

長防禦處置の義に付ては、妄りに堂上方へ立入周旋ケ間敷事有之候ては、御處置の品從朝廷出候とも、御眞意に無之様相當り、恐入候義に付、朝廷の聖斷を可奉仰事。而して會藩より、之を紀州桑名其他の親藩に通達せしめらる。因



て近衛九條廣幡の諸公は、二條關白に逼り、我藩が説を入れざる中に、長州處分を決せんと欲し、私かに戸田大和守をして、幕府に説かしめたるの結果、七日に至り、慶喜公より左の奉答書を捧げられたり、

防長御處置の義に付御内尋の趣拜承仕り候右は私へ御尋御座候儀に候へば兼て被仰出候通り衆議を被爲盡候上被仰出候方に可有御座、眞の英斷を以て被仰出候儀に候はゞ別段存寄無御座候以上

長州處分の職

此時、我會藩は京師の警衛を解かれ、薩土等の諸藩を以て替られ、且長州處分に運動せんと欲するも、只管無事平和を先とせる慶喜公乃慶永の止むる所となり、時局益々非に赴く、八日に至り、二條關白より國事掛親王、公卿一同及び慶喜公以下在京の諸侯一同を、盡く朝廷に召され、三條以下六卿、毛利父子の官位を復し、入

京を許し、幽屏を赦免するの條を議せしめられたり、此日、慶喜容保、慶永の三公は、病を以て參朝せざりき、而して會議天明に徹して議論決せず、薩藝等の有志は、意氣壯烈、干戈に懣へても長州赦免の事を決せんと、其準備の爲め、四方に奔走し、京師爲めに騒然たり、之れ實に幕府が征長の役に敗北せしより、優勝劣敗の數、遂に冠履轉倒、一旦賊名を得たるもの、忽ち廟堂の要路に坐らんとするに至れるなり、他日、鳥羽伏見の變、東北の亂、實に此長州處分に基因せずんばあらず、

(二) 薩長天下の政治を執る

是より先き、岩倉具視卿は、公武合牀派の熱心なる一人なりしを以て過激公卿の斥くる所となり、嵯峨野に蟄居せしが、薩長が合牀説を變じ、朝廷を挾んで天下の政權を握らんとする、其勢遂に徳川幕府よりも勝れるを見、遂に薩長の士と共に討幕の大運動

岩倉卿薩長と共に改革を行す

をなせり、而して討幕の密勅を得るや、偶々慶喜公が大政奉還するに遇ひしも、其實權未だ猶慶喜公に在るを以て、之を遠く政界より斥けて、政權を己等が手裡に收めんと、先づ頼りに毛利父子等の赦免に盡力し、十一月八日、洛中住居を許され、京都に歸りき次で薩藩主島津忠義、及び其家臣西郷吉之助、大久保市藏等と謀り、十二月九日を以て、大革新を行はんと、中山忠能、嵯峨實愛の兩卿を以て、密旨を請はしめ、而して徳川氏政權奉還後の處分を内定し、急に薩土、藝尾、越五藩の重臣を召し、革新の議に與らしめ、九日を以て參朝すべきとを其主君に傳へ、同時に戒嚴の事を命じ、五藩の兵士をして、官門及び京師の要所に配して不虞を戒しむ、是に於て、七卿及び長州、處分、徳川氏處置、大革新の準備、全く熟し、幕府及び會桑等諸藩の夢にだも知らざるの間、否多少之を探知せるも、未だ説をなすの暇もあらざる間に於て、電光石火、國家の

京師戒嚴

長州侯及七卿を赦免す

大事を斷行せんとせり、九日、勅命を以て、岩倉具視卿及び三條以下六卿と毛利父子には、罪を免せられ、官位を復舊せられたり、又九條、久我、千種、富小路、滋野井、正親町、鷲尾の諸卿の蟄居を赦され、廣橋、六條、野宮、久世、豊橋、伏原、裏辻の諸卿の參朝を停め、謹慎を命せられたり、而して岩倉卿は、兼て王政復古に關する詔勅、及び法案等を舛して、參朝し、中御門卿等と天顏に咫尺し、今日を以て斷行すべきとを奏聞し、革新に着手せり、乃ち親王家には太宰帥熾仁親王、常陸大守晃親王、一品純仁親王、彰仁親王、諸侯には徳川慶勝、松平慶永、山内豊信、島津忠義、淺野茂勳、又諸侯の重役には尾藩荒川甚作、丹羽淳太郎、田中邦之輔、越前藩中根雪江、酒井十之丞、毛受藤次、薩藩西郷吉之助、大久保市藏、岩下治右衛門、藝藩辻將曹、櫻井與四郎、久保田平司、土藩後藤象二郎、福岡藤次、神山左多衛を召され、五藩の兵を以て、禁闕の内外を嚴衛せしめ、終に王政復古

王政復古の布告

の大號令を發して、先づ之を天下に布告せられたり、其文に曰く、  
 德川内府従前御委任大政返上將軍職辭退之兩條今般斷然被  
 聞食候抑癸丑以來未曾有之國難先帝頻年被惱宸襟候御次第  
 衆庶之所知に候依之被決叙慮王政復古國威挽回之御基本被  
 爲立度候間自今攝關幕府等廢絶即今總裁議定參與之三職を  
 置れ万機可被爲行諸事神武の始に原き縉紳武辨堂上地下の  
 別なく至當の公議を竭し天下と休戚を同く可被遊叙慮に付  
 各勉勵奮來驕惰の汚習を洗ひ盡忠報國の誠を以て可致行候  
 事

三職を新設す

其他革新につき、諸々の法律告諭を發布せられぬ、此時内覽勅問  
 御人數、國事御用掛、議奏、武家傳奏、守護職、所司代等を廢され、新に  
 總裁議定參與の三職を置かれたり、

總裁 有栖川宮

議定 仁和寺宮

山階宮

中山前大納言

正親町三條前大納言

中御門中納言

尾張大納言

越前宰相

安藝少將

土佐少將

薩摩少將

參與 大原宰相

万里小路右大辨宰相

長谷三位

岩倉前中將

橋本少將

尾張藩士三人

越前藩士三人

薩摩藩士三人

土藩士三人

藝藩士三人

此夜、總裁、議定、參與及び五藩の重臣を召し、小御所に於て、御前會  
 議を開き、德川氏處分を議す、山内豊信昂然先づ起て論して曰く、  
 天下革新の初に當り、至誠の心を披き、公議公論を盡して、以て之

德川氏處分の職

土州侯の  
意見

を處するにあらずんば、決して人心を服し、民望に副ふと能はず、然るに今日の事たる、頗る陰險に涉り、諸藩兇器を擁して、宮闕を警め、曩日の私憤を迸發して、共に國事に肝膽を披瀝するの量なく、其不義、其弄權も亦甚し、抑も徳川氏が二百有餘年、勤王に民治に心を碎き、太平の世たらしめ、文物の開進を致し、其勳功少ならず、而して一朝之を度外に斥くるが如き、何ぞ其忍べるの甚しきや、況んや慶喜公、祖先繼承の霸業を棄て、敢て大權を朝廷に奉還し、以て政令一途に出てしめ、國家の大計を定めたるの忠誠あるに於てを、實に勤王の熱情、鬱積するにあらずんば、誰か幾多の生命を賭して、收め得たる霸業、十數代無事に繼續し得たる大權を返上せんや、然るに今日の大革新を行ふに當り、之を宮中に參列せしめず、二三公卿と五藩の士に限れるは何事ぞ、公議公論の本旨に背く、是より大なるはなし、二三の公卿輩、何等の定

岩倉卿の  
意見

見ありて、此暴舉をなし、天下の亂階を開かんと欲する耶、と大聲喝破すれば、松平慶永、松平慶勝、及び家臣等は、之を賛して、慶喜公を召さんとす、岩倉卿之を聞き、聲を勵して曰く、徳川家康、天下を掌握し、太平の治を致し、功少からず、雖ども、其子孫に至るに及び、徒に威權を弄し、殊に嘉永癸丑以來、勅旨に違背し、綱紀を紊亂し、内は忠誠の公卿侯伯を幽囚し、志士を戕害し、外は以て擅に夷狄と盟約し、貿易を許し、怨を百姓に結び、禍を社稷に歸したると、其罪亦大なりとす、慶喜果して至誠の心あらば、當に官位を退き、土地を返納すべし、然るに、今徒に政權の虚名を奉還して、土地人民の實權を専有す、心術の正邪、以て見るべきのみ、何ぞ俄に之を延て大議に參與せしむべけんや、宜しく之に退官納地を示諭すべし、而して不平の色なく、自責の實を明にせば、召じて任用し、若し之を奉ずる能はずんば、速に其罪を聲らして、之を討伐すべ

し、島津忠義、淺野茂勳、及び其家臣等、之に同意し、其論戰、駁撃、雲湧き風生じ、容易に決すべくも見えざりしが、暫く休憩して再議せんと、皆退く、時に岩倉卿、豊信にして自説を張らんには最早事止む、事を一呼吸の下に決するの外他あるを見ずと決心し、匕首を懷にし、休息の室に於て茂勳等と百方反対者を説伏し、再議の席には遂に卿の議に決し、退官納地の事は、尾越兩侯より慶喜公に諷し、其手續をなさしむると定まり、三更を過くる比、其議を終れり、

慶喜公二條城に將士を集む

時に慶喜公は二條城に在りて、天下の形勢を觀察し、容保公は薩長の陰謀を豫知し、大に爲す所あらんとせしが、慶喜公の留むる所となりて、徐ろに薩長の行爲に注目したりしが、已に朝廷は彼等が手に入り、霹靂一聲、豫想外なる大革命を斷行するに遇ひ、其公議公論に因るにあらざるを激昂し、二三の公卿と雄藩との策

畧なるを憤懣し、且長州兵は此時より意氣揚々として、陸續京師に入るを見て、全く彼等に謀られたるを怒れり、是に於て、慶喜公會桑兩藩の諸士をして二條城に入らしめたり、

(三) 慶喜公の下坂

慶喜公退官上地を迫らる

會桑と薩長の軋轢

十二月十日、松平慶永、二條城に赴き、退官納地の内旨を傳へたるに、慶喜公は廢職の事は謹んで之を了す、辭官上地は人心鎮靜の日を待て、之を奉ずべしと答へたり、而して一方には薩長藝の兵禁闕にありて、討幕の準備を整へ、今にも討て出でんとい、一方には會桑幕府の兵、二條城にありて、君側の姦を掃はんとし、龍虎相睨し、熊羆相對し、殺氣暗愴、密雲漠々、將に叱雷叱電の活劇を演じ、是非曲直は劍光砲聲の間に定めんとし、人心恟々、京師騷然、荷擔洛外に避くものあり、然るに慶喜公は、彼我輦轂の下に争闘し、政權奉還の實を水泡に歸し、勤王忠誠の本心を誤解されんとを憂

慶喜公大坂に下る

ふるの、實直なる心より、二條城に居るの不利なるを慮り、大坂に退かんと欲す、我藩の諸將士之を聞き、薩長の術數益々計るべからざるを説き、切に二條城に留り、局面を一變し、勅命を奉じて天下有爲の諸侯を召し、廣く公議公論に因り、王政復興の實を擧げ、兼ての赤心を畫餅ならしめざらんと言ふ、慶喜公肯かず、十三日を以て書を朝廷に上り、容保公及び松平定敬を始として、若年寄等の幕吏を從へ、急遽大坂に下れり、其書の畧に曰く、

防長御處置の儀に付内々御尋の上、叡慮の通り仰出され異議申上候族も無之筋には候へども萬一異存の輩有之騷動に及び候儀有之ては御幼君にも在せられ候折柄自然御驚動は勿論皇威も如何と深く叡慮を惱され候御次第にて鎮撫説得力を盡し候様御沙汰の趣奉畏候其後宮闕戎裝を以て御固の上、非常の御變革仰出され候に就ては何分多人数の鎮撫方深

く心配仕候不肖ながら誠意を以て尊王攘夷の道を盡し罷在候へども徒に下輩の粗忽より水泡に屬し候様に相成ては此上深く恐入候に付右人心折合ひ候迄暫時大坂表へ罷越候尤伺濟の上出立可仕筈に候へども彼是手間取候内に萬々一輕輩の過誤より國家の御大事を牽出し候ては恐入候に付直様出發仕候

朝廷慶喜公に上京を命ず

大阪城中將士の激昂

已にして慶喜公大阪城に入るや、朝廷の諸卿大に驚き、以爲く、慶喜大阪に在て持重の策を持し、在京の諸藩を離間し、薩長をして竟に孤立せしめ、而て攝津の海岸を占領し、軍艦を以て海路を扼し、西南の交通を絶ち、以て京師の糧道を塞くならん、と先づ會桑兩藩の入京を禁じ、慶喜公をして上京すべきとを命ず、而して大阪城は討幕の密勅と云ひ、王政の革新と云ひ、退官上地と云ひ、皆前日の朝旨と相反せるは、之れ討幕攘夷派の浪士輩が、漫りに幼

會津史 卷之七 二十 池内田藏版

會津史 卷之七 二十一 池内田藏版

君を狹んで畫策し謀りて徳川氏を復讐的に陥穿するものなり、  
 と悲歌慷慨衆論鼎の沸くが如く激騰し主辱しめらるれば則臣  
 死すと絶叫し敢て薩長の勢威に屈伏し姦人の箝制を受けんや  
 と呼號せり是に於て十八日慶喜公左の如き上奏文を捧呈して  
 訴ふる所ありたり、

某不肖苦心焦慮宇内の形勢を熟察し政權一に出で萬國並立  
 の御國威相輝き候ため廣く天下の公議を盡し不朽の御基本  
 相立度との微衷より祖宗繼承の政權を奉歸し同心協力政律  
 御確定有之度普く列藩の見込可相尋旨建言仕り猶將軍職御  
 辭退申上候處召の諸侯衆議相決し候迄は是迄の通に可相心  
 得旨御沙汰に付右參着の上は同心戮力天下の公議輿論を採  
 り大公正平の御規則相立奉存候外に他念無之且夕企望罷在  
 候處豈料らんや今度臣某へ顛末の御沙汰無之而已ならず詰

合列藩の衆議だにも無之俄に一兩藩戎裝を以て宮闕に立入  
 り未曾有の大變革仰出され候由にて先帝より御遺托の攝政  
 殿下を停職し舊眷の宮堂上方を擯斥せられ遂に先朝譴責の  
 公卿數名を拔擢し陪臣の輩猥に玉座近く徘徊し數千年來の  
 朝典を汚し其餘とも御趣意柄兼々被仰出候御沙汰の趣とは  
 悉く霄壤相反し實以て恐愕の至に奉存候假令聖斷より出さ  
 せられ候にても忠諫し奉る可き筈況んや當今御幼冲の君に  
 て被爲在候折柄右様の次第に立至り候ては天下の亂階萬民  
 の塗炭眼前に迫り建言の素願も不相立金甌無釁の皇統も如  
 何被爲在候哉と恐痛し奉り候特更外國交際の際儀は皇國一躰  
 に關係仕候事件に付前件の如き聖斷を矯め候輩一時の所見  
 を以て御處置相成候ては皇國の大害を醸し候は必然と別し  
 て深憂仕候最前眞の聖意より被仰出候御沙汰に隨ひ天下の

公論相決し候迄は是迄の通り取扱ひ罷在候速に天下列藩の衆議を盡させられ正を挙げ奸を退け萬世不朽の御規則相立ち上は宸襟を寧し奉り下は萬民を安じ候様仕度某千萬懇願の至に奉存候

(四) 伏見鳥羽の戦機

此時江戸に於て過激の浪士夥しく薩邸に潜伏し市街を横行して子女を掠め富豪の家を劫かし或は暗殺強盗を事とし隊伍をなして幕府の金庫に亂入し兇行亂暴至らざるなく遂に江戸市中の警備を司りたる酒井左衛門尉の屯所を襲撃せしを以て幕府兵を發して薩邸を焼き其不逞の徒を追捕せり乃ち報大阪に至る是に於て城中益々彼等が幼主を擁して專權國家を擾亂するを憤り曰く薩長の舉動疑ふべきもの少からず今慶喜公の入朝する若し護衛なくんば事測られず宜しく兵を率ゐて上京すべしと是に至りては流石寛宏謹慎なる慶喜公も國家の禍害をなし庶民を苦ましむる小人輩の跋扈を看過するを得ず如何に平和を希望すとは雖ども國家を擾亂すると斯の如くなるに至りては恬然之を默視するに忍ぶ能はず遂に勅命により上京するを機とし左の如き討薩の表を上らんと欲し會桑等の諸藩を率ゐ伏見鳥羽兩道より京師に入らんと其部署を定めたり時に慶應三年十二月三十日なり

薩の過激浪士江戸を横行す

慶喜公討薩の表を率らんとす

慶喜公會桑諸藩を率ゐて入京す

辰正月十日於柳營大廣間閣老美濃守殿壹岐守殿兵部大輔殿渡書付

臣慶喜謹而去月以來の御事件奉恐察候得共一に朝廷の御眞意には無之全く松平修理大夫奸臣共陰謀より出候は天下所共知殊に江戸長崎野州相州所々亂暴劫盜に及候も同藩の唱道により東西響應皇國を亂し候所業別紙の通にて天人共所



僧御座候間前文の奸臣とも御引渡し御座候様御沙汰被下度  
萬一御採用不相成候はゞ不得止誅戮を加へ可申候此段謹而  
奉奏聞候

別紙

一大事件盡衆議と被仰出候處去月九日突然非常御變革を口  
實に致し奉侮幼主諸般御處置私論を主張候事

一主上御幼冲の折柄先帝御依託被爲在候攝政殿を廢し止參  
内候事

一私意を以て宮堂上方を妄に黜陟せしむる事

一九州其外御警衛と唱へ他藩の者を煽動し兵仗を以宮闕に  
迫候條不憚朝廷大不敬の事

一家來浮浪の徒を語合ひ屋敷に屯集江戸市中押込強盜致し  
酒井左衛門尉人數屯所へ砲發亂妨し其他野州相州所々燒

討劫盜に及候證據分明に有之候事

右閣老より菊の間縁頼詰へ達

一先般獻言の次第も有之候處豈料んや松平修理大夫家來共  
要幼帝不盡公議矯竊慮不暇枚舉依之別紙兩通奏聞を遂げ  
大義に寄て君側の奸を掃候に付速に駈登り軍列可相加も  
の也

徳川氏進  
發の狀勢

明くれば慶應四年即ち明治元年戊辰正月三日會桑兩藩を先供  
とし其他酒井雅樂頭(姫路)松平讃岐守(高松)松平隠岐守(松山)戸田  
采女正(大垣)松平左近將監(濱田)松平大和守(忍)牧野備前守(長岡)の  
諸侯を始とし親藩譜代の諸侯は皆後詰を命せられ慶喜公には  
瀧川久保田等の親兵歩砲諸隊を率ゐて進發せり其人數凡て一  
万餘なり

京師に於ては之を聞き大膽にも却て討幕の名義を得たるもの

京軍鳥羽  
伏見に關  
門を守る

津藩徳川  
氏の爲り  
山崎の  
關門を守  
る

鳥羽の戦

の如く喜び、好機失ふべからずと、大に戦畧を論議確定し、諸軍を部署し、薩將伊知地正治、長將山田市之丞、伏見鳥羽に關門を設け、備を嚴にして、徐ろに徳川氏の來るを、邀撃せんと待てり、而して西園寺公望卿は精兵三百を以て丹波口に、橋本實梁、柳原前光の諸卿は大津口に向ふ、總軍凡そ三千人皆開戦を期せり、此一舉や、實に天下勝敗の繫る所、是非曲直の分るゝ所なり、彼が如何に決心を固め、死中活を求むるの策に出でしかを知るべし、彼は若し事成らずんば、鳳輦を廣島に誘ひ奉り、再舉を謀らんと覺悟せり、是より先き、幕府は津藩藤堂和泉守の兵をして、高槻街道に在る山崎の關門を守らしめしが、是に於て、固く此處を扼して、以て京軍の此方面より、進出するを防ぐに備へしめたり、

(五) 正月三日の戦

正月三日、徳川の先驅、鳥羽の關門に至る、京軍の戍兵ありて軍裝

して以て、關門を通過するとを許さず、我は勅命により上京するものなれば、強て關門を開かんとを求む、京軍固く執て應せず、乃ち幕臣竹中丹波守、京軍を諭して曰く、寡君勅旨を奉じて入朝せんとす、須らく鳥羽伏見二關を開くべし、と京軍曰く、慶喜公の入京は、大兵を率ゆるを許さず、と固より之を拒めり、竹中遂に要領を得ず、京軍亦口舌の能く徳川の人數を退かしむる能はざるを知り、先つ敵の勢威を挫き、一舉之を掃はんと、突然巨煩を發して、我不意を襲ふ、我一隊之が爲め悉く打倒されたり、是に於て、我は大に其暴を怒り、俄に戦備を整へ直に之に應じて砲撃し、霹靂地に震ひ、烟燄天に漲る、京軍勢猛烈、我軍將に敗れんとす、時に援兵來り會し、勢大に振ひ、吶喊疾く攻め、關門を破らんとす、時已に日暮蒼然、人色を辨せず、兩軍乃ち交綏せり、此夜我軍、京軍を侮りて備へず、唯翌日の戦捷を期し、甲を解き、餐

鳥羽口の  
大阪軍京

軍の夜襲に遇ふ

を傳ふ、京軍之を探知し、直ちに進發して襲撃す、我軍其不意に驚き、俄に之を防ぎて利あらず、適々後軍の來り援ふありて、兵氣大に振ひ、卒に返戦して京軍の中堅を稀突す、是に於て、京軍大に擾れ、隊將市木、大山等之に死せり、然れども我軍遂に其左翼より破られ退くに至りぬ、

伏見の戦

此日、我藩砲兵奉行林權助は、一番大砲隊を率ゐて、伏見方面の先驅となり、淀より進んで伏見に至り、先づ町奉行の邸前に休息して、午餐を喫し了り、關門を通らんとす、然るに此關門は薩土の兵堅く守りて、軍裝するもの、通行を許さず、因て其事由を具して、之を本營に問ふ、時に薩土の京軍已に全く戦備整頓せしを以て、先づ大砲を發して戦端を開く、是に於て、林權助急に亦戦備を整へ、大砲三門を以て之に應ず、其間僅かに數間を隔つるのみ、兩軍の砲聲山野に轟き、硝煙天地を被ふ、次て我槍隊彈雨を冒し、硝煙

大砲隊長 林權助の奮闘

を衝き、急に突貫す、然れども京軍は人家に潜み、叢中に伏し以て狙撃す、我兵殞るゝもの算なし、急使を發して後軍生駒隊に來援を乞ふ、生駒隊督將の命なしとて援はず、是に於て、隊長林權助以下皆死を決して一歩も退かさざらんことを期し、再び鋭進、猛撃せり、時に權助銃丸に中る、三度、猶意氣慷慨、毫も屈撓せず、全隊を指揮す、爲に我兵勇氣一倍殊死して進む、時に京軍亦勢猖獗、火を我隊の後面に放ち、以て歸路を絶ち、其陣形擾るゝを待て、之を鑿撃せんとす、會々會將佐川官兵衛は別撰組を率ゐて來り援け、奮闘猛進、敵の中堅を衝く、此時石州濱田の一隊、亦應援として來り會す、因て互に全力を盡して戦ふ、然れども林隊は其援兵と共に突然重圍の中に陥りたるが如くなるを以て、即ち自ら火を奉行邸に放ちて市外に退きて固守す、已にして伏見市街一面の猛火となりしを以て、或は野營を張り、或は淀に歸れり、後數日林權助紀海

船中に死せり、  
 此日は、之れ徳川氏存亡の分るゝ時なり、正邪曲直の決するの日なり、兩軍の殊死奮闘實に想像すべきなり、而して彼は僅少の兵を統一して、戦畧を練り、決死以て積年の素志を貫かんと欲し、此は多兵を恃みて京軍を侮り、統一を欠き、戦畧を講せず、然れども會桑兩藩意氣慷慨死を知て生を知らず、兩軍の勝敗未だ知るべからざるなり、

(六) 正月四日の戦

四日、此日は之れ如何なる日ぞ、公武合躰派の一日も忘るゝ能はざるの日にして、徳川氏と死生存亡を共にせし會桑諸藩の、他日戦を投じて恭順罪を謝するの止むを得ざるに至り、万世感慨に堪へざるの日なり、即ち昨日、敗軍の結果として、朝廷に於ては仁和寺宮純仁親王を以て總督となし、公然徳川氏及び隨行せる

朝廷徳川氏及會桑諸藩主の官爵を削り追討の令を布く

鳥羽の再戦

大砲隊長白井五郎太夫勇戦す

諸侯の官爵を削り、追討の令を公布せり、徳川氏及び我公等は是より朝敵の汚名を被るに至れり、味爽徳川軍は一大決戦を試みんと、鳥羽伏見の二道より進軍し、皆殊死して戦ひ、勢風雨の如く、吶喊の聲地を動す、京軍辟易して將に鳥散魚潰の觀を呈せんとす、時に東寺に陣せし總督殿下、錦旗を撃けて鳥羽方面に進む、京軍爲に勢を回復す、是より先き、京軍鳥羽附近の竹林に兵を伏す、我軍之を知らず、勢に乗じて進撃す、即ち伏兵俄に起りて烈しく我中堅を亂射す、彈丸雨の如く、概ね虚發なし、京軍之を見返撃突進す、我軍遂に支ふるを得ず、退きて淀に入る、我佐久間近江守窪田備前守等の諸將之に死す、  
 而して我會藩の將、白井五郎太夫は、京軍の本營たる城山に進軍す可きの命を得、大砲隊を率ゐて直ちに出兵せしが、行くと半里急使あり、鳥羽方面の戦危し、直ちに應援すべしと、即ち返して淀

に到る、此時再び急使あり告ぐるに鳥羽方面の大敗を以てす、因て我林隊を後陣となし、疾驅して小橋に至る、時に敗兵重沓し、隊伍亦紛々たり、京軍勢破竹の如く其鋒當るべからず、隊長白井之を見て大に怒り、何ぞ薩長の弱兵に背後を見せんや、と此處に逆撃せんとす、而して此附近平田多く頗る防禦の便を欠くを以て、壘を積み假に胸壁を築きて防ぐ、然れども京軍最も慥健勝に乗じて奮闘し、彈丸劇射、雨の如し、白井隊は此時初度の開戦なりしを以て、屈せず力戦せしと雖ども、全隊動もすれば亂れんとす、隊長白井大喝して曰く、決死以て會津男子の名を汚す勿れど、士卒爲めに氣を鼓し、先を争ひて進む、京軍之に敵するも能はず、遂に大敗す、白井隊乃ち火を鳥羽附近の人家に放ち、勢に乗じて突進猛撃し、殆んど京師に入る、然るに暮色暗愴、因て追撃を止む、而して上田隊をして此地を守らしめ、其全軍は淀に退きて休せり、

伏見の再戦

三度鳥羽に戦ふ

此日、伏見方面亦互に死力を盡して奮戦せりと雖ども、徳川軍其進路を開かんと欲して、附近の人家に火を放ちしかば、烟焰天を蔽ひ、却て進路を失ひ、橋梁を焼失し、空しく京軍の砲撃に會し、遂に支ふる能はずして退く、

(七) 正月五日の戦

五日、味爽、徳川軍再び勇を奮ひ、伏見鳥羽兩道の京軍と戦ふ、而して昨夜鳥羽方面に駐陣せし上田隊は、京軍の鋭鋒に敵する能はず、將に守を棄て、退かんとす、時に白井、林等の諸隊來り援ふ、然れども前夜上田隊は、其守備を怠り、京軍の劇射を防ぐ爲に設けたりし、壘の胸壁を破壊し、以て其壘の上に安臥せしに因り、遂に京軍の急撃に際し、再び胸壁を築くの暇なく、頗る防禦の便を欠くに至れり、而して京軍は前夜の失敗を回復せんが爲め、兵氣を鼓舞して縦横奮戦す、時に京軍伏見方面の徳川軍を破り、進んで

三度伏見に戦ふ

淀の戦

我が白井、林、上田の諸隊を圍む、隊長白井大聲兵士を叱咤し、縦横奮闘し、遂に飛丸に中りて仆る、時に大垣の兵疾驅來り援ふに遇ひ、數度激戦せしが衆寡敵せず、遂に淀に退く、此時我諸隊長多く戦死せり、次て京軍追撃し來り、淀に迫り橋を隔て、連りに巨砲を發す、我軍亦之に應じて砲撃し、密に槍手百人を蘆葦の中に伏せしめ、別に銃隊を出して京軍を誘出せしも、京軍早くも伏を覺りて敢て進まず、時に京軍の隊長石川厚狹介、勵聲して曰く、今此危を視て、逡巡す、天下の笑を如何せん、と、銃手を率ゑ衆に挺て、進む、諸隊先を争ふて之に繼ぐ、忽ち我伏兵左右より起り、吶喊して亂撃し、前面の銃隊亦劇射す、京軍爲めに大に敗れ、石川、伊東、中島等の諸將之に死し、其他士卒の死傷算なし、然るに其餘の隊長柳田、伊集院、後藤等大に怒り、敗兵を叱咤し、衆を督勵し、殊死して進む、我軍淀藩の京軍に通じ、我後を襲はんとするの風あるを恐

れ、遂に橋本に退く、時已に正午を過ぐ、

此時に當り、山崎の關門は、津藩、藤堂和泉守之を守りしが、我軍に叛き、京軍に歸せり、然れども我軍未だ之を覺らざりき、

(八) 正月六日の戦

橋本の戦

淀藩京軍に通ず

六日、京軍淀藩兵を先鋒とし、鋭進して橋本に迫る、是より先き、京阪兩軍の開戦するや、淀藩は中立して勝敗を觀望せしが、我軍の連敗を見、心を京軍に通じ、五日我軍の退て淀城を根據となさんとせしに、城兵拒て入れず、因て我軍は止むを得ず、城外に露營す、而して京軍の進んで淀を占領するや、却て淀藩が我軍と款を通ずるに非らざるやを疑ひ、使を遣はして嚴に之を詰問す、淀藩乃ち具に事情を分疏して二心なきを訴ふ、是に於て、京軍意始て釋け、淀藩を以て先鋒とせり、我軍亦死力を出して之を逃へ戦ふ、京軍兵少く將に大に潰んとす、此時兩端を持したる山崎の津藩の

津藩の變  
心

兵は之を見て踏阻逡巡殆んど爲す所を知らず因て京軍急使を發して速に應援すべきとを嚴促す是に於て乎津藩は斷然意を決し山崎の營所より巨砲を發して突然横に我軍の牙營たる酒井の陣所を撃つ我軍大に驚き全隊爲めに頗る擾る然れども遂に能く隊伍を整へ淀河を隔て山崎の津藩と砲戦す京軍乃ち漸く兵勢を回復し機に乗じて猛進す時に我軍連日の敗績に兵氣阻喪し士卒疲羸し唯死を決して戦はんとするもの會桑兩藩のみ然れども大河の決する一手の能く止むる所にあらず故に遂に京軍に抗する能はずして大阪に退けり

(九) 大阪城退去

會桑の諸隊大阪に退くや大阪城の形勝に據て守備を修め東西佐幕の諸侯に檄し江戸と相應じて以て猶薩長と天下を争はんと欲せり然るに是より先き鳥羽伏見の戦方に酣なるや慶喜公

慶喜公會  
桑兩公大  
阪城を退  
く

大阪軍の  
將士解散  
る  
江戸に走

は容保公と大阪城に歸り敗報頻りに至るも終には我兵の勢を挽回して最後の全捷を得るならんと衆を待み敢て意に介せざりしが我軍連戦連敗橋本に退くと聞き其意外に驚き急に諸將を會して守備を議せしも群議囂々其決するの時を知らず而して京軍將に逼らんとすと聞き此夜慶喜容保の兩公は松平定敬及び板倉勝靜小笠原長行等の諸侯と共に大阪城を出て安治川口を渡り海邊に沿ふて兵庫に至り是より軍艦回陽に乗じ江戸に還れり因て會桑諸隊の大阪に来るや已に首領を失ひ亦止り戦ふに由なく兵氣俄に沮喪し皆傷を裹み血を拭ふに暇なく其大阪の堅城天下の要地を未だ敵なきに捨て隨意に紀州路或は伊賀を経て東に走れり慶喜公の去るや大阪城に駐在せし幕吏は翌七日慶喜公退城の旨を達したり其文左の如し

上意の趣先般尾張大納言殿松平大藏大輔を以て上洛可致旨

大阪軍敗  
朝の源由

奉蒙御内議候に付先供の者四隊關門迄相越候處松平修理大夫家來無謂通行差止兼て伏兵の手配致置き突然彼より及砲發兵端を開き粗暴の所業及候は全く松平修理大夫家來とも一己の所業に無之剩へ矯敷慮朝敵の名を負せ他藩の者を煽動し人心疑惑を抱き戦利あらず此分にては夥多の人命を損じ候事は不及申可被安宸襟誠意不相貫絶泣の際曲直判然万慮不本意の事共見込も有之兵隊引揚げ軍艦にて一と先歸館追々申聞候儀も有之候間銘々同心相議爲國可抽忠勤事抑大阪軍の敗歸する所以一にして足らず實に左に列舉せしが如きは其著大なるものならん、

一彼は初めより殊死以て大軍に當らんとの決心あり此は唯多兵を待みて戦畧を講せず、

二彼は朝命に依りて津藩等を隨へ以て兵氣を鼓舞し此は賊

名を蒙らんとを恐れて逡巡するもの多し、

三彼は初め攘夷を主張し長門海峡に鹿兒島灣に屢々洋人と戦争し以て實戦に練熟し此は會桑兩藩を除くの外更に氣慨あるものなく兵氣萎靡して振はず、

四彼は戮心合力一致の運動をなし此は諸藩の軍區々にして號令一に出でず全軍の進退操縦意の如くなる能はず、

五彼は四面山岳を以て圍繞し自ら天然の城郭をなす所の京師の形勝に據り此は漫然大阪城を發して大軍を京師南面の一方なる而かも彈丸黒子の伏見鳥羽に進めて其全軍相呼應する能はず、

六彼は丹波近江の方面に多く兵を分遣する能はずして専ら力を伏見鳥羽に注ぎ此は敵の弱點なる諸道に更に意を傾けず悠然と一時に運動し能はざる大軍をして敵の戦備堅



固をる伏見鳥羽の一方に向はしむ、

七彼は京の四面他に應援するの諸藩なく、孤立却て鷄鼠の勢あり、此は大舉大阪を發せば、四方の諸藩蜂起して、附從せんと誤信せり、

八彼は征長の役及び攘夷の舉に經驗し、兵器の運用に長じ、此は己れの勇悍を恃みて、未だ兵式の改新に慣れず、唯舊制に依るもの多し、

九彼は權謀術數に富み、此は淳朴實正、自信を固執して他あるを知らず、

十彼は全然德川氏及其黨與を惡み、必ず干戈に訴へて之を打破蹂躪し、以て回天の業を成さんとを期し、此は示威以て僅かに君側を清め、己れの赤誠を表はさんと欲し、國家を憂ふるも、更に天下に志なく、全然京地を修羅場となすを欲せず、

而して劍舞砲發、錦旗の眼前に進み來るを豫想せざりき、故に瞬間順逆地を易へたるに愕き、只管砲烟彈雨の益々朝廷の疑を深ふして、忠誠の熱情を蔽はんかを恐れたり、其連戰連敗異しむに足らざるなり、

(十) 德川氏の恭順

多年の功勞と、盡國の赤誠を、硝烟彈雨と共に消散せしめたる伏見の一敗如何に慶喜容保の兩公をして其意外に驚かしめたるや、如何に勤王の忠誠達せず却て王師を勞するを憂へしめたるや、正月六日、天下の堅城を棄て、東に歸らんと、軍艦回陽に乗じ、風波の爲め九日まで紀州沖に滞在し、十一日夜横濱に着し、十二日僅に十七騎にて江戸城に入る、市民等其慶喜公を郊迎せる、若年寄兩人の陪蓑するを見て、初めて前將軍たるを知り、皆富貴常なく、盛衰敷を転じ、而して榮枯の來る一瞬間、人生の變遷一彈指

前將軍江戸に歸る

東征の師

なるを歎じ、覺えず、嘔啼流涕せざるものなし。

次で朝廷に於ては、有栖川熾仁親王を親征大總督に、正親町中將、西四辻大夫、西郷吉之助、林玖太郎を參謀に、而て少將橋本實梁を東海道先鋒、兼鎮撫使總督に、侍從柳原前光を副總督に、木梨精一郎、海江田武治を參謀に、又大夫岩倉具定を、東山道先鋒、兼鎮撫使總督に、岩倉具經を副總督に、板垣退助、宇田栗園を參謀に、任じ、又高倉永祐を北陸道先鋒、兼鎮撫使總督に、四條大夫を副總督に、小林兼吉、津田山三郎を參謀に、任じ、又澤宜嘉を奥州鎮撫使總督に、醍醐少將を副總督に、黒田清隆、品川彌二郎を參謀に、任じ、又聖護院宮を海軍總督に、中山前中將伊藤外記、島田左馬吉、曾我祐準を參謀に、任じ、東海東山兩道より進みて、江戸を挾撃せんとす。是に於て、有栖川大總督は薩州、長州、紀州、備前、因州、越前、大村、細川、藤堂等十餘藩の兵を率ゐて、東海道より、岩倉總督は薩長の別隊、土州、

江戸城中の議

因州、大垣の兵を率ゐて、東山道よりし、而して高倉總督は信州より北陸に向ふ。

江戸城中に於ては、慶喜公歸府以來、慷慨激烈、京軍を邀撃せんとするもの多し、廿三日の夜、慶喜公重臣を會して衆議を聽く、皆開戦を云ふ、獨り勝義邦、國內相闘ぎ、外敵の乘する所とならんを憂へ、衆議を排して和議の今日に必要なる所以を説く、其言恟々、其語切々、皆愛國の熱情に出つ、祖宗繼承の政柄を辭すると、敵履を棄つるが如くなる、慶喜公は、固之れ、眼底、國家億兆の安寧を見るのみ、勤王報効の大義を知るのみ、義邦の言を聞くや、豁然大に悟り、遂に其恭順の説を容れ、二月十二日左の諭達及上奏文を草して、江戸城を退き、城外なる上野東叡山大慈院に入り、恭順の意を朝廷に表したり、

此度御追討使御差向可被遊段被仰出候哉之趣遙に奉承知誠

以驚入奉恐入候次第に候右は全一言之申上様無之儀に付何様の御沙汰有之候共無遺憾奉命致候心得にて別紙之通奏聞狀差出候依之東叡山に退、謹慎罷在罪を一身に引受只管朝廷へ御詫申上億萬之生靈塗炭之苦を免し候様致度志願此事に候就而は何も予か意を躰認し心得違無之恭順之道不取失様可致候

又其奏聞狀は左の如し、

此度御遣討使御差向可被爲在候哉之趣遙々奉承知識以驚入奉恐入候次第に御座候右は全慶喜一身之不束より生候次第にて天怒に觸候段一言之申上候様も無御座次第に付此上何様の御沙汰御座候共聊無遺憾奉畏候所存にて東叡山に退き謹慎仕候其段下々へも厚く申論し假令官軍差向御座候共不敬之儀等毫末も不爲仕心得に御座候得共弊國之義は四方之

士民輻輳之土地に御座候得者多人數中には万一心得違之者無之共難計右邊より恭順之意を取失ひ不敬之儀等有之節は尙更奉恐入候而已ならず億兆之生靈塗炭之苦を蒙候様に而は實以不忍之次第に付向來官軍御差向之義は暫時御猶豫被成下度臣慶喜之一身を被罪無罪之生民塗炭を免れ候様仕度臣慶喜今日之懇願此事に御座候

右之趣厚御諒察被成下前文之次第御聞届被爲在候様涕泣奉歎願候此段御奏聞被成下候様奉願候以上

二月

慶 喜

此時容保公亦恭順の事に決し國に就けり而して伏見の役に敗れたる兵士數十隊陸續として江戸に歸り恭順の説行はるゝと聞き悲歌慷慨諸所に屯して密に議する所あり若年寄堀右京亮の如きは恭順説成ると聞き悲憤措かず慶喜公の面前に屠腹し

慶喜公恭  
順水戸に  
屏居す

て、死するに至る三月六日、慶喜公、山岡鐵太郎をして駿府なる六  
總督の本營に至り、恭順の意を陳せしむ、參謀西郷吉之助之に接  
し、數ヶの條件を以て和議を許す、時に東海道先鋒進みて池上東  
門寺に陣し、將に十五日を期して江戸城を攻めんとす、

十四日、徳川氏の重臣連署、駿府の條件に因り、哀訴を先鋒の營に  
捧けたり、

是より先き、西郷吉之助、駿府より東海道先鋒の營に至り、進んで  
江戸高輪薩州邸に於て、勝義邦と會見し、徳川氏の恭順につき周  
旋す、是に於て、吉之助、徳川氏の哀願書を携へ、馳せて駿府なる大  
總督の本營に至りて、事狀を具申し、次て京師に赴き、之を議す、而  
して京師の議皆慶喜公死罪の論なりしが、吉之助獨り反對し、固  
く哀訴を容るべきとを主張して動かざりければ、朝議遂に之に  
決す、因て四月四日、勅使橋本實梁、柳原前光の二卿、江戸城に入り

左の勅旨を示せり、

- 一 城明渡尾張藩へ可相渡之事
- 一 軍艦銃砲引渡可申追而相當可被返下之事
- 一 城内居住の家臣共城外へ引退き謹慎可罷在之事
- 一 慶喜謀叛相助け候者重罪たるに依り嚴科に處せらるべき  
の處格別の寛典を以死一等可被宥の間相當の處置致し言  
上可仕之事

但し万石以上は朝裁を以御處置可被爲之事

本月十一日を期し各件處置可致様御沙汰に候事

當時和を悦ばざる血性激昂の壯士、密かに謀りて事を擧げんと  
するものあり、而して異變なく此講和を見るに至れるもの、勝等  
の苦心盡瘁に因れるなり、

十一日、慶喜公江戸城を開き、家臣數名を爵し、水戸に退きたり、是

勝沼の戦

より先き、伏見鳥羽の變起らざるや、朝廷慶喜公に、二百万石を與ふるの内議ありしが、是に於て七十万石を與ふ。是より先き、三月、東山道先鋒、信州上諏訪に於て一隊を分ち、參謀板垣退助をして之を率ゐ、甲州を畧せしむ、然るに元新撰組隊長近藤勇、伏見の敗後慶喜公に従ひて東に歸り、大に師を興して西軍に當らんとを勸めしが、其計用ゐられず、乃ち姓名を變じて大久保剛と稱し、同志土方歳三と共に、所部百餘人を率ゐて甲府に赴き、據て以て西軍を遮斷せんとし、勝沼驛に達す、甲府の士又將に之に應せんとす、然るに甲府は西軍の占領する所となり、遂に西軍と勝沼に開戦し、敗れて下總に退く、是に於て、東山道の西軍江戸に入り、海道の軍と合せり、

彰義隊上野に據る

次て四月、我會藩士の江戸に駐まりしもの、幕士中氣節あるものと共に、主家の汚名を雪かんと欲す、同志相集まること三千餘人、遊撃歩兵、猶興、純忠、精忠、貫義、旭、臥龍、神木、松石、万字、馬勝、浩氣、白虎、水心の十五隊に分ち、幕臣澁澤誠一郎を推して長となし、隊名を彰義と名け、上野東叡山に屯し、徳川處分の彼長州處分に比して過酷なるに不平を稱へ、其勢甚た激烈なり、西軍乃ち之を討滅せんと、十五日味爽より攻撃す、彰義隊應戦之を市内に斥く、時に薩兵門を破て入る、彰義隊其旗を見て曰く、是薩人なり、彼こそは我仇敵なれと、奮戦猛撃、敵兵丸に中り殪る、者其數を知らず、西軍屈せず、跳て山に上り、白刃を振り、突進せり、彰義隊遂に退きて中堂に入り、拒戦甚た力めしが、西軍猛進火を放て寺を焼き、烟焰天に漲り、高樓傑閣皆焦土となす、是に於て、覺王院義觀大に驚き、急に東叡山門主法輪親王を奉じ、間道より奥州に走り、彰義隊は火起るを以て復戦ふ能はず、或は討死し、或は脱走し、遂に大に敗る、根津、團子坂、及び坂本新門口の方面亦敗れ、遂に東國に逃走せり、

悲歌の壯士江戸を脱す

東軍結城に據る

宇都宮西軍に通ず

近藤勇敵手に死す

(十一) 總野の戰

彰義隊敗虜の前後、舊幕吏旗下及び會津の士にして、江戸を脱し東北に走るもの多きが中に、歩兵奉行、大鳥圭介は、我藩士秋月登之助と共に、歩兵千六百餘人を率ゐて下總に走り、撤兵頭、福田八郎、右衛門は、撤兵隊千五百餘人を率ゐて上總に走り、海軍副總裁、榎本釜次郎は、軍艦七隻を率ゐて房州に走り、小栗忠順は海陸軍奉行并罷職の後、農兵を組織せんと上野に走る。時に近藤勇は勝沼の敗後、名を大久保大和と稱し、敗兵を糺合して、下總の流山に駐在す、而して謝罪恭順説を不當なりとして、不平なる江戸殘留の會藩士、柳田理記、野田進、野尻泉、中澤某等は多く姓名を變じ、舊幕將古屋作左衛門等千餘人と共に、信州鎮撫として上州に出て、三月一日、築田驛に於て西軍と相衝突し、一戰の後一隊は轉じて下總結城に至り、彰義隊の別隊と共に、其藩主水野勝知が内訌に

因て、其城に入る能はざるを援け、廿五日、城に據りて勝知に従はざる結城藩士を一戰のもとに撃退して、其内訌を鎮めたり、時に宇都宮藩主戸田忠友、西軍に應じて之を聞き、佐幕黨大に至れりとなし、援を江戸に乞ふ、江戸に於ては薩、長、土、及彦根、須坂、館林、笠間、壬生の諸藩に令して、兵を總野に出さしむ、而して薩土の兵は先づ流山を攻めんと進み來り、其參謀香川敬三等、詐り謀りて隊長近藤勇を招き、縛して之を斬り、四月三日、長軍及館林、須坂の兵と合して、急に結城城に迫る、是より先き、我藩士及彰義隊は、内訌鎮定後已に去り、結城藩の重臣等は西軍の陣營に至り、抗敵するの意なきことを陳せしも、肯せず、皆斬らる、次て西軍不意に城を砲撃して陥れ、一軍は之に據り、一軍は宇都宮に赴きたり、古屋作左衛門等は、築田戰爭の後、野州に赴き、會津に入らんと欲す、然れども會津は當時未だ開戦論に傾かず、家老西郷頼母等恭

順に奔走するの時なるを以て、暫く總野の東軍と相聲援して奥羽の形勢を偵ふ、終に奥羽同盟論起り、開戦論盛なりと聞き、且糧食硝薬に窮せるを以て會津に入る、

大鳥圭介  
日光山に  
據る

是より先き、大鳥圭介、秋月登之助等七聯草風の二隊、及び會津の諸士を率ゐて、日光山に據りしが、西軍日光を襲撃せんとするを聞き、平野に出て、曾て傳習訓練せし新式戦法を試みんと欲し、行々佐幕の東軍を合して、總軍凡そ二千餘人、四月十五日進んで、小山の西軍を襲ふ、此西軍は大鳥等の大舉して至ると聞き、宇都宮を出て、之を逆撃せんと、小山に進みたるものなり、已にして戦を開き、互に死力を盡して挑みしが、我軍の勢甚だ猛烈、其鋒當るべからず、西軍遂に披靡、大に敗れて宇都宮に走る、

諸川の戦

此日、結城の西軍も、亦大鳥等の來り迫ると聞き、城を出て、諸川驛の近傍に至り、忽ち我兵に會して開戦す、已にして我兵漸く加

小山の戦

東軍宇都  
宮城を陥  
落す

はり、兵威益々盛なるを以て、西軍氣沮み、遂に走りて宇都宮の西軍と合す、因て我軍結城に據る、大鳥圭介は、如楓と號し、性正毅豪膽、豁畧に通じ、善く兵を用ひ、幕府八万の旗下中、稀に見る處の人物なり、十七日、圭介東軍を率ゐて西軍と、再び小山の驛東に戦ふ、東軍の開散意の如く、奮撃突進、益々戦線を擴張して進む、西軍の兵多く舊式なるを以て、死傷算なく、遂に支ふる能はず、兵器陣具を捨て、宇都宮に潰走す、十九日、圭介諸軍を率ゐ、連戦連勝の勢に乗じて、宇都宮に進撃す、時に西軍兵を分て城外に逆へ戦ふ、東軍散兵を以て之を砲撃す、西軍勢窮して支ふる能はず、遂に敗れて城に退く、適々東軍の一隊鹿沼より來り會し、又會津の一軍日光警衛として山王峠を越え來り謝罪哀願の達する能はざるを知り、之に應援す、因て東軍益々勢を得、奮前猛進、城の三面より轟撃し、彈丸雨の如く、砲聲雷

の如し、西軍苦戰其支ふべからざるを慮り、夜に乗じて城の南門より出て、古河及館林に走る。此時會津の謝罪哀訴、中途雍塞して通達せず、仙臺諸藩は、朝命を以て、已に會津の國境に逼りつゝあるの時なり。

岩井の戦

此時に當り、東軍兵勢大に振ひ、西軍萎靡して死するか如し、即ち江戸には西軍の敗報、荐りに至り、急を告ぐる者相繼ぐ、因て督府薩長土因の兵をして赴き援けしむ。此援兵四月廿日、進んで岩井驛に至らんとして、東軍の誠忠、回天、純義の三隊凡そ千餘人と、驛外に會戦し、遂に東軍を破りて進みしが、宇都宮の東軍壬生に薄ると聞き、土因の兵先つ壬生の北二里安塚に至る。廿二日、東軍之を聞き、夜不意に因軍を撃つ、其勢崩濤狂瀾の如し、因軍支へず、大に敗る。土軍之に代て進撃す、時已に黎明、而して大霧冥濛咫尺を辨せず、東軍因兵の北くるを追ひ驛内に入る、忽ち土軍の魚貫し

安塚の戦

て突進するに會し、彼我混亂、間數歩に出でず、互に劍を閃かして接戦し、銃を擧げて格闘す、東軍勢鋭く、土軍大に潰え將に走らんとす、時に土の別隊壬生に在りしが、急を聞て馳せ加はり、砲撃我中堅を衝く、東軍亦雲集し力戰奮闘、時を移し、が遂に支へず、宇都宮に退く、此戦方に酣なるとき、東軍竊に謀り、別に奇兵一小隊を放ち、壬生城の備なきを襲ふ、然れども寡兵にして其抜くべからざるを察し、火を民家に放ちて去る。

宇都宮城落つ

廿三日、西軍勝に乗じて宇都宮に來り迫る、東軍城を距ると一里許りに兵を備へて防ぎ、別隊をして間道より敵の後を擣く、彈丸兩飛、西軍大に亂る、薩長の別軍雀の宮に在る者、其危を聞き、急に馳せて之を援け、協力して我軍に當り、進んで城に逼る、我軍兵を分ちて明神八幡の二山に登り、山上より砲撃す、西軍山の四面を圍み烈しく戦ひ、銃丸霰の如く、硝煙天を蔽ひ、日色晦冥、人色を辨



今市の戦

ぜず、午後五時、會藩櫻井隊、拔刀敵陣に進み、縦横突撃す、官軍之が爲め多く死傷を生ず、因州の隊長河田佐久間、叱咤吼衆を勵し、死を決して城に登り、直に其一角を抜く、此時に當て、西軍の攻撃勢風雨の如く、城内及び二山に據りし兵遂に支へず、圍を衝きて日光に退く、官軍遂に城を復す、既にして我、會將山川大藏は、大鳥圭介等と共に日光より兵を出し、西軍を今市に撃つ、西軍之れと戦ひ、遂に勝敗決せざりしが、土州の兵其不意に出で夾み撃つ、是に於て、大藏圭介等急に今市を抜く能はざるを知り、遂に見兵數百人を率ゐて退く、

太田原の戦

五月朔、東軍千餘人、三斗小屋口に出で、二日更に進んで太田原城に迫り、之を抜く、已にして西軍大舉至ると聞き、急に三斗小屋口に退き、拒守して八月に至る、先きに今市を進撃して抜く能はざりし大鳥、山川、田中の諸隊は、五月七日再び出で、今市を攻む、亦

今市の再戦

抜く能はずして退く、而して此方面の我兵は六月廿六日、鹽谷郡藤原村に退き、壘を築きて西軍と戦ひ、之を卻け、固守して八月に至れり、此時に當り西軍の一軍は進みて奥州白川城に迫り、一軍は越後長岡方面に進みたり、

(十一) 奥羽同盟

夫れ大義名分の存する所は朝廷なり、而るに彼薩長は陰謀詭計朝廷に周旋して自黨を得、巧に大義名分を假り、以て昔日の主義を替へ、自説を變じたるのみならず、却て戟を向け、銃を擬して政權を己れが手に移さんとす、之れ時機を察して大勢に順ひたるの事實もあらんと雖も、一意天下の政權を強奪し、我をして亦起つ能はざる迄に、威焰を發揚せんと欲するのみにして、少しも俱に國家を匡正せんとするの誠義あるを見ず、而して初めより容保公にして政權を争ふの覺悟あらしめなば、如何ぞ大義名分を

會津の方

空しく彼に奪はるものならんや、然るに公は専ら京師の重職を盡さんとするに餘念なく、他に彼と政權を争はんとの覺悟なかりしなり、其地位能く機を制し、名分を收むるに好適せりと雖も、唯専ら誠と義を以て、此錯雜紛亂せる國事を處し、勢に靡かず成敗を顧みず、遂に彼の巧詐百出するを圖らず、大義名分を敵手に委せしなり、而して其伏見の一敗、大義名分彼に移りしにも關はらず、猶薩長に抗せんとせしは、實に彼が不正と不義を要めばなり、謝罪哀願擁塞して衷情達せざるを恨めばなり、長州が一旦賊と呼ばれたりと雖も、其連戰連捷、遂に罪名を免かれたるのみならず、而かも國家の要路に當れるを知り、我亦奮進優勝、冤を雪ぎ、赤誠を天朝に達貫せんと欲すればなり、

是より先き、慶喜公江戸に歸り恭順に決するや、容保公其家臣を率ゐて會津に歸る、實に戊辰三月なり、次で上野法輪親王及ひ加

容保公の謝罪

賀、尾張紀伊、仙台、越前、熊本、土佐等二十餘の諸侯に由て、罪を朝廷に謝し、且つ王師に抗するの意なき所以を明にす、而して薩長は伏見の一戰後威焰益々揚り、法輪親王は途にして拒まれ、列侯依違觀望、之を憚りて達せず、獨り米澤藩使を若松に來らしめ、切に謝罪降伏を勸む、因て我世子喜徳公米澤藩主に頼て、雪冤の事を囑す、其書左の如し、

歎願書

謹て言上仕候老寡君容保儀去成年京都守護職被命候處弊邑の儀は東奥の藩鎮且帝都を離間の事二百餘里應援達響の道も無覺束力を計り其任に勝へざらん事を恐れ辭退申候得共其節の御事艱難皇國の安危に拘り候御場合故強て可相勤旨被命候に付數百年來の隆恩奉報度闔國決議京都を以て憤墓の地と心得罷登り大樹尊王の趣意致遠奉周旋奉職仕候然

る處不圖も蒙先帝無限の寵眷御賞譽の宸翰を下し賜り其外  
 度々御宸筆被下置恩賜の品々も幾度となく拜戴仕候元來容  
 保儀誠實一片勵精致毛髮も私意無御座候に付先朝以來格別  
 の御依頼を蒙り大病の折柄は無勿躰も至尊之身を以て於内  
 侍所御祈禱被遊下君臣水魚の情態宸翰の表にも御顯し被下  
 當朝に至ても先帝以來叡感思召被下參議被推任前後天恩の  
 難有主從感戴泣謝罷在候隨て大樹よりも度々の褒賞有之彼  
 是重々の隆恩闔國肝膽に銘し冥加至極難有奉存候前件の通  
 兩朝歴然たる厚眷容保の誠實前後相替候義分寸も無之候伏  
 見戰爭の義は徳川内府上洛先供一同登京の途中發砲被致武  
 門の習不得止應兵及一戰候儀にて敢て闕下を犯候儀毛頭無  
 之は万人共に知る處に御座候右に付今日に於て不料も不慮  
 の汚名を蒙候處臣子の至情日夜慟哭不雪君冤死すども不止

ど闔國決心仕候頑固の習風何共撫諭の道無之於私共極々苦  
 心仕候間此上は寸時も早く雲霧快晴一藩の人民安堵仕候様  
 幾重にも奉懇願候

別紙宸翰の儀は先帝御深意被爲入被下置候儀故深筐底に藏  
 置候得共國事危急之今日に差迫候に付御内々奉入御覽候間  
 此段御重憐被成下乍恐御奉答聞の儀伏て奉歎願候恐惶謹言

松平若狹守家老

田中土佐

神保内藏助

梶原平馬

上田大學輔

内藤介右衛門

諏訪伊助

使 奥羽鎮撫

仙臺諸藩の兵會津の國境に迫る  
仙米兩藩會津の爲めに謝罪を周旋す

四月、容保公、家臣梶原平馬、伊藤左太夫、土屋宗太郎、河原善右衛門、山田貞助をして米澤に至り、仙米兩藩に依て、救解せんとを謀らしむ。是より先き、二月廿六日、朝廷、左大臣九條道孝卿を奥羽鎮撫總督に、三位澤爲量卿を副總督に、薩人大山格之助、黒田了介、長人世良修藏、品川彌次郎を參謀に任じ、三月二日、其一行京師を發し、大阪より軍艦に搭し、十八日、陸前宮古濱に上陸し、二十三日、仙臺に入り、仙臺藩を以て、會津追討の先鋒となし、米澤藩を以て之を援けしめ、又秋田藩を以て、莊内追討の先鋒となし、盛岡藩をして之を援けしむ。乃ち仙臺藩主伊達慶邦朝命を奉じて、四月十一日、兵を率ゐて白石城に入り、次で會津の國境に逼る。我兵撃て之を斥く。已にして我藩米澤藩の言に従ひ、仙米兩藩に依て謝罪せんとするに會し、仙兵進軍を止め、奥羽列藩の重臣を會して其意見を諮ひ、遂に左の如き書を鎮撫總督に呈せり。

會津容保爲謝罪歎願家來共相越候に付陣門へ相通し承候次第は別而御届申上置候通に御座候處右容保恭順謹慎降伏謝罪の義只管歎願申出候に付一先戰爭爲相控置候餘の義は追て可申上候得共先以爲御聞置此段御届申上候以上

閏四月三日

仙臺中將内 但木 土佐

米澤中將内 竹股 美作

總督參謀乃ち左の書を達す、

今般會津容保爲謝罪歎願家來共相越候由米澤より申出に付陣門へ相通候段届書の趣を以て總督府へ申入候處至今日謝罪歎願の名は相立不申悔悟降伏謝罪の廉は當二月中頃の事に可有之其儀に候は、近日白河口進撃出陣先陣門へ罷出歎願可申出候又容保並家來の者心底情實の處篤と相糺可申出此段相達候事

但悔悟降伏候は、其藩周旋の者一同白河口へ可罷出候事

鎮撫總督參謀

閏四月

世良修藏

大山格之助

是に於て、仙米兩藩主は、主として再び奥羽列藩の意見を問はんが爲め、書を各藩に飛ばして、其重臣を白石城下に會せんとを促かす、

因て列藩は、各重臣を派遣して、白石城下に會し、閏四月十一日、救解せんとを議す、我會藩の重臣は左の歎願書に連署調印して差出せり

會津歎願書

弊藩の儀者山谷之間に僻居罷在風氣陋劣人心頑愚にして舊習に泥み世變に暗き土俗に御座候處老寡君京都守護職被申

付候以來乍不及天朝尊崇奉安宸襟一途之存念より他事無之粉骨碎身罷在り万端不行届之儀には候へ共朝廷之御垂憐を蒙り多年之間何とか奉職仕居臣子之冥加無此上難有奉存鴻恩万分の一も奉報度闔國奮勵罷在奉對朝廷御後闇昧の心事神人に誓ひ毛頭無御座伏見一舉之儀は事卒然に發不得止次第柄にて亦異心等有之儀には毛頭無之候へども一旦奉驚天聽候段奉恐入候次第に付歸邑之上退隱恭順罷在候處此度鎮撫使御東下御兩藩へ征討之命相下候由承知仕愕然之至り斯迄奉惱宸襟候儀何共可申上様無御座候此上城中に安居仕候ては奉恐入候に付城外に屏居罷在奉待御沙汰候間一視同仁の御宥恕を以て寛大之御沙汰被成下度家臣舉て奉歎願候右之段幾重にも厚御汲量被下宜御取計之程深く奉懇願候以上

慶應四年閏四月

會津家老 西郷頼母

奥羽諸藩  
白石に會  
す

梶原平馬

一瀬要人

仙臺米澤兩侯添歎願書

討會先鋒被仰付兩國共出兵罷在已に仙臺先手勢及接戰候處  
 今般降伏謝罪之儀容保家來共申出候に付仙臺國境於陣門間  
 罪督責爲致候處伏見暴動之一舉者畢竟兼て示方不行届より  
 全く卒然に發し奉驚天聽候段至極恐縮之餘り容保儀者歸呂  
 退隱の上當時於城外恭順謹慎相盡し頗る前非を悔悟罷在寬  
 大之御處置被成下候様別紙歎願書之通家來共申出候間益々  
 天朝之御仁德奉感戴候様御處置奉仰望候會津國情等之儀は  
 委細演説を以申上候通に御座候間御汲量寬典之御沙汰被成  
 下候様一同奉懇願候以上

閏四月十一日

仙臺中將

各藩連名歎願書

米澤中將

此度會津征討被仰付各藩出兵既に仙臺先手勢及接戰候處容  
 保家來共降伏謝罪之儀申出仙臺國境陣門に於て糺明相遂候  
 處伏見暴動の儀は全く異心等有之筋には無御座候得共事皆  
 卒然に相發奉驚天聽候段深く恐入其節之先手隊長等は別而  
 謹慎申付置奉待御沙汰如何様共處置仕候由に御座候畢竟容  
 保兼て示方不行届之所致候段至極恐縮仕當時城外に於て恭  
 順謹慎相盡先非悔悟罷在家來共歎願書を以て申出降伏謝罪  
 仕候上者幾重にも寬大の御處置被成下至仁之聖恩奉感戴候  
 様奉仰望候尤當時王政御一新之御場合にも被爲在候得ば何  
 分不被爲動干戈人心之向背をも深く可被爲有御汲量御時節  
 と奉存候勿論春夏間農時之甚急務に爲る所に有之自然民命

の大に所關係に御座候間是等の儀共篤と御諒察被成下今日  
の事は只に會津孤國而已之御處置と不被思召寛大之御沙汰  
被成下候は、實以奥羽御鎮撫之道赫然被爲立候様偏に存込  
列藩衆議相盡し奉懇願候尙又連名外之輩者驅付次第可奉申  
上候恐惶謹言

慶應四年閏四月

伊達陸奥守家來

坂 英力(仙臺藩)

但 木土佐

上杉彈正大弼家來

千坂太郎左衛門(米澤藩)

竹股美作

南部美濃守家來

野々村眞澄(盛岡藩)

丹羽左京太夫家來

丹羽 一學(二本松藩)

松平大學頭家來

三浦平八郎(守山藩)

阿部美作守家來

平田彈右衛門(棚倉藩)

相馬因幡守家來

相馬 靱負(中村藩)

秋田万之助家來

大浦 帶刀(三春藩)

水野眞次郎家來

水野三郎右衛門(山形藩)

板倉甲斐守家來

池田權左衛門(福島藩)

藤井伊豆守家來

渡邊五郎左衛門(上山藩)

岩城左京太夫家來

大平 伊織(龜田藩)

田村右京太夫家來

佐藤長太夫(一關藩)

生駒大内藏家來

椎川嘉藤太(矢島藩)

十二日、仙米の兩藩、伊達慶邦、上杉齊憲の兩侯は、白石を發して岩  
沼に至り、九條總督に謁し、歎願書を呈し、且つ請て曰く、松平容保、  
翻然悔悟する所あり、城外に屏居して其地を削り、其首謀を誅し、  
其罪を待んとす、朝廷特典を以て其請を許さるれば、則ち是れ皆  
に容保一人の幸なるのみならず、奥羽の人民の幸福之に過ぐる

仙米兩藩  
主會津の  
恭順を鎮  
撫總督に  
乞ふ

無けん苟も之を窮討せんと欲せば、奥羽二州の民塗炭に陥り、各藩の向背亦未だ知るべからず、總督請ふ之を諒せられんとを、と九條總督之を諾しければ、仙米二侯は、十三日岩沼を發して白石に歸りたり、

參謀世良  
會津の謝  
罪恭順を  
許さず

參謀世良修藏獨り會津の謝罪を信せず、總督に謂て曰く、會津降を請ふと雖ども、其實封境を鎖し、兵を弄せんとするに在り、故に其請を容るべからず、と歎願書を却下したり、其舉動嘗て幕府が長州を征して和を許したるが如き、寛柔なる手段にはあらざるなり、

會士廣澤  
安任江戸  
に留り會  
津の恭順  
を哀訴す

是より先き、我藩士廣澤安任、慶喜公恭順し、我藩公罪を謝し而かも猶許されず、君臣國に就き、干戈の禍將に起らんとするを悲憤して曰く、我公の忠誠朝廷に達せず、事此に至る亦何をか言はん、然れども泰西諸國、虎視眈々、其罅隙を窺ふ、是れ豈兄弟壻に闕ぐ

の秋ならんや、而して朝幕薩長、會桑の理非善惡、委曲始終能く之を知る者は、吾輩あるのみ、想ふに事局をして此に陥らしめて而して其責を負はざるは、男子の深く恥つる所なり、必ず總督府に哀訴し、宇内の形勢を説き、公武の事情を陳し、兵を休するを乞ひ、猶ほ聽れざれば、自ら罪を引き、主君の罪なきを表明し、内亂を救ひ、死して然して後己まんと、獨り東京に留まり、大久保忠寛一勝義邦房安等の協力斡旋を以て、西軍の參謀西郷吉之助、海江田武治に因り、四月容保公の遺す所の書を總督府に出し、且つ衷情を陳す、容保公謝罪二十餘疏中、達するを得るもの、只此一書のみ、時に幕士等江戸を脱走するもの相繼ぎ、總野の天、暗雲慘愴、遂に宇都宮、日光等の戰報荐りに至る、是に於て、事連り勢結び、既往の苦心水泡に歸し、事の成功恃むべからざるが如くなりぬ、然れども參謀西郷は、英邁果斷にして、天理人情の至誠を有するの傑士なり、



故に安任、猶西郷の盡力、或は意の如く事を處せんとを想ふ、時に大總督府謝罪を容れ、將に安任に報せんとす、而して忽ち姦人の爲に誘陥せられ、滿腔の丹心を吐露すると能はず、遂に獄中に投ぜられたり。

奥羽諸藩  
同盟して  
西軍を拒  
まん白  
石に會議  
す

之れに因て、奥羽列藩の人心、俄に其王師の躁急詭激なるを憤慨激昂し、彼薩長猥りに朝廷を籠絡し、兵を出して王師と假稱し、以て暴威を天下に振はんとするの野心ならずんばあらず、然らざれば何ぞ事情を察せず、只管戦を好み、民を苦しめ、國を擾さんとす、やと將に禍機潰裂收拾すべからざらんとす、乃ち仙米兩藩主左の書を鎮撫總督に出し、次て閏四月廿三日、聯合盟約して俱に共に薩長の蹂躪を防かんと、列藩の重臣を白石に會して議す、五月三日、復仙臺城下の會議所に集り、左の建白書及同盟書に調印したり。

今般會津容保降伏謝罪の儀家來共歎願申出候に付、國情等の義委細演説の上、寛大の御沙汰被成下候様過日奉懇願候處、朝敵不可容天地罪人に付難被爲及御沙汰早々討入可奏成功旨御達の趣承知仕候固より降伏謝罪顯然の事にて降者は容れ拒者は討候こそ、王者の兵に有之殊に、更始御一新の御被爲動干戈候義は於天朝必不被爲好旨、征討總督府より御沙汰相成居候次第有之此上押て御征討の命被相下候義、乍恐公明正大の御處置如何と奉存候、加之當時農桑繁盛の折柄諸藩數万の出兵万民徵發轉輸の苦に不堪既に處々一揆等相起候勢實以て不忍聞最早蒼生塗炭に陥候間是まで出兵の分番兵のみ差置解兵仕り、猶又衆議相盡奉伺太政官候外他事無御座候間此段御届申上候以上

閏四月

仙臺 中將

米澤 中將

太政官建白書

方今王政復古更始一新之御盛業遠土僻郷の奥羽諸藩爲臣子  
 者は申上候に不及海隅山中の矇昧の賤民に至迄上下一同御  
 布告の趣奉感服實に上古列聖の御盛徳にも被爲踰海外万国  
 と並峙對立の御大業も不日に御成就可被爲在海内富强万民  
 鼓腹の太平を奉歌候御儀と遙に奉拜九重感泣仰望不仕者は  
 無御座候尙又京師より鎮撫の皇使參謀等御東下の上は敷慮  
 の御深意親く如奉接玉音眞實可奉伺と奉歡欣喜望候處何圖  
 ん九條殿下等仙臺御着陣の即日會津追討の先鋒嚴急に被仰  
 出御仁恤の御趣意聊も不奉伺列藩傳承愕然恐懼万民不知所  
 措手足騷擾動亂可申上様も無御座候固より勅命至嚴一刻も  
 猶豫可仕様無之仙臺始先鋒は會津口にて及接戰候處容保儀

斯まで奉觸天怒候段深く恐入悔悟降伏城外に謹慎罷在封土  
 を被爲削伏見誤事重臣の首級を差出候との三ヶ條を以奉謝  
 罪度旨仙臺米澤の兩藩へ申出候に付國情委細に探索糺問仕  
 候處聊相違無御座候間歎願書受取兩中將添紙を以て九條殿  
 下へ奉歎願奥羽列藩陪臣連名の歎願をも差出候處容保儀不  
 可容天地罪人難被爲及御沙汰早々討入可奏成功旨奉伺一同  
 驚歎失望仕候先年長州暴臣於闕下發砲仕候一條實に不憚朝  
 廷一時奉驚天聽候大罪速に朝敵の名を被相下幕府へ追討の  
 命被仰出候處暴舉三臣の首級を差出及謝罪其後王政復古の  
 聖運に遭遇仕俄に望外の寛典を奉蒙官位如故即時入京をも  
 被差免候次第も有之容保とても伏見の一舉輕卒の至とは乍  
 申敢て奉對禁闕砲發仕候儀にも無御座候長州の罪狀と輕重  
 大小如何可有之哉其段は臣子の所可議に無御座候へば右三

一條を以て奉謝罪候儀強ち不當の妄願共不奉存然る處尙又  
 不可容天地罪人と御座候ては乍恐公平至當の罪名と難奉伺  
 奥羽列藩人心の向背如何可有之哉と窃に爲朝廷奉痛惜其段  
 九條殿下へ言上の上太政官へ奉伺候外有之間敷と衆議一決  
 し一先解兵仕候儀に御坐候扱又莊内追討の命卒然と被仰出  
 候は全く鎮撫總督の御眞意にも無之參謀大山格之助世良修  
 造等宿怨を快く仕度狂暴の私意に出候敷と万人の所疑にて  
 反覆思慮仕候ても朝敵の跡は聊も不相見追討の命は却て奉  
 累聖德候も奉恐入候間是又前同様評決の上解兵仕候抑王政  
 復古更始一新の折柄如此奉矯王命一己の私怨を恣に仕候者  
 を其儘被指置掠財貪色残忍強暴無所不至万民塗炭の苦に陥  
 り候ては鎮撫御三卿御仁恤の御誠意少も貫徹不仕實に王政  
 復古大業の妨害と相成候は目前に御座候得は被爲於太政官

候ては疾に右の事實を被爲得候御儀と奉存候間天下億兆皆  
 朝廷彼大山の徒を深く被爲惡候御所置を拜承仕胸中の疑惑  
 氷解雲霧を開き天日を望候如く奉仰御聖德御新政に怡服仕  
 候様更に一層の御盛舉被爲在度奥羽諸藩一統の至願此事に  
 御座候猶前文に奉申上候奥羽列藩早已に奉服王政上下舉て  
 奉補翼御盛舉之万一維持皇國被爲於天朝永く東願の御憂不  
 被爲在候様仕度大義至忠天に誓て他念無御座候間會莊二藩  
 寛典の御處置速に被仰出且鎮撫使御下向御仁恤の御盛意も  
 水泡に不罷成候様御挽回專一の御儀と奉存候尙又陪臣僻陋  
 の愚見を以て方今の御急務を奉擬議候は千萬恐縮の至奉存  
 候得共徳川氏家名被立下候御儀廣大の御活眼被爲開官位の  
 高下封土の大小人心に叶ひ無偏無頗奮慕臣等一同感服仕候  
 正大の御處置被爲在候は、隨て奥羽諸藩も安堵如故不動干

戈復古の御誠意は蝦夷唐太の邊迄貫徹流通可仕候哉と奉存  
候陪臣等不堪感激之至誠惶々々頓首百拜謹て奉言上候以上

慶應四年五月

- 伊達陸奥守内 但木土佐花押
- 上杉彈正大弼内 竹股美作花押
- 南部美濃守内 野々村眞澄花押
- 佐竹右京大夫内 戸村十太夫花押
- 津輕越中守内 山中兵部花押
- 丹羽左京大夫内 丹羽一學花押
- 松平大學頭内 岡田彦左衛門花押
- 戸澤中務大輔内 舟生源右衛門花押
- 南部遠江守内 吉岡左膳花押
- 阿部美作守内 梅村角兵衛花押
- 相馬因幡守内 相馬靱負花押

- 秋田万之助内 秋田帶刀花押
- 水野眞次郎内 水野三郎右衛門花押
- 安藤理三郎内 三田八彌花押
- 松前志摩守内 下岡彈正花押
- 板倉甲斐守内 池田權左衛門花押
- 六郷兵庫頭内 六郷大學花押
- 本多能登守内 石井武右衛門花押
- 岩城左京大夫内 大平伊織花押
- 内藤長壽内 池田彦助花押
- 立花出雲守内 屋山外記花押
- 生駒大内藏内 椎川嘉藤太花押
- 田村右京大夫内 佐藤長太夫花押
- 藤井伊豆守内 渡邊五郎左衛門花押

同廿五藩條約書

織田兵部大輔内 長 井 廣 記 花 押

今度奥羽列藩會議於仙臺告鎮撫總督府以欲盟約執公平正大之道同心協力上尊王室下撫恤人民維持皇國而安宸襟仍條例如左

- 一 以伸大義天下爲目的不可拘泥小節細行事
- 一 如同舟涉海可以信居以義動事
- 一 若有不慮急要之事比隣各藩速援救可報告總督府事
- 一 勿負強凌弱勿計私營利勿泄機事離間同盟
- 一 築造城堡運搬糧食雖不得止勿漫令百姓勞役不勝愁苦
- 一 大事件列藩集議可歸公平之旨細微則可隨其宜事
- 一 通謀他國或出兵隣境可報同盟事
- 一 勿殺戮無辜勿掠奪金穀凡事涉不義者可加嚴刑事

右之條々於有違背者則列藩集議可嚴譴者也

慶應四年五月

奥羽列藩家老連名花押如前

參謀世良  
刺客の爲  
めに斬ら  
る

秋田藩西  
軍に通ず

初め世良の歎願書を斥くるや、列藩の士皆曰く、彼等は決して王者の師を參謀するものにあらず、其名を假て私怨を報せんとするのみ、殊に世良の如き請謁を納れ、威權を弄して、暴逆無道至らざるなし、と時に仙臺藩は、參謀世良が新莊在陣なる同僚大山格之助に宛て、歎願許容不可を論じたる密書を得て、益々憤慨し、世良が福島の妓樓にあるを探知し、有志二人面會を求めて、其密書の理由を詰問し、遂に之を斬り、其首を白石に送れり、是に於て、奥羽の同盟愈々固く、東西兩軍の事情全く梗塞して、相通せざるに至る、此時仙臺駐在の九條總督、新莊駐在の澤副總督、討會征莊の暇もあらず、却て其身を措く所なし、因て秋田藩の未だ方向定らず、同盟に加はらざるを以て、澤副總督は漸く秋田に至り、九條總

督は仙臺を退きて盛岡に至りしが、盛岡亦同盟の一藩なれば、弘前に至らんとす。時に秋田の状況を聞き、遂に秋田に至れり。是より先き、仙米會は、秋田藩西軍に應ずると聞き、兵を出して其國境に臨みしかば、秋田藩副總督に暫く此地を退かんとを乞ひ、副總督は去て野代に至りき。是に於て、野代より再び秋田に歸り、九條總督に會し、其一藩をして同盟に抗せしむ。秋田藩乃ち鎮撫使を携へ歸らんとせし。仙臺の使節至るに際し、十一名を殺し、一藩の方向を定む。是より一層奥羽諸藩は會莊兩藩に力を戮せんとせり。

會津史 卷之七終

明治三十年五月五日印刷  
 明治三十年七月七日發行

正價金參拾五錢

著者

福島縣平民

池内儀八

福島縣若松甲賀町  
 百八番地

發行者

福島縣平民

池内清治郎

福島縣若松町大字馬  
 場上五ノ町廿二番地

印刷者

島保藏

東京市牛込區市谷加賀町  
 一丁目十六番地

印刷所

株式會社 秀英舍第一工場

東京市牛込區市谷加賀町  
 一丁目十二番地



一手販賣

岩代若松馬場下一ノ町

河野忠三郎

東京市神田區表神保町

東京堂

全

八尾新助

全 日本橋區通リ登丁目

大倉孫兵衛

全 京橋區元數寄屋町三丁目

信文堂本店

全 淺草區茅町二丁目

松成堂

全 京橋區南紺屋町

小川寅松

岩代若松一ノ町

信文堂

全

森万作

全

齋藤八四郎

全 若松甲賀町

荒井書店

全 若松大町

伊藤文華堂

全 若松七日町

田中善平

全 若松七日町

博盛館

特約大賣所

賣捌店

奥羽其他各縣各地ノ書肆

會津史

卷八

館書圖京東

冊說奈函類門



耕雨關塲忠武關

相城池內儀人著

# 寶澤史

第八卷

明治三十年五月出版

會津史目次

卷八

第八編 保科氏 後松平氏

第六章下 容保公の佐幕

- (十三) 會津の決心
- (十四) 北越同盟
- (十五) 長岡藩の義烈
- (十六) 小千谷方面の戦
- (十七) 桑名藩の決心
- (十八) 片貝方面の戦
- (十九) 榎峠の戦
- (二十) 長岡陥落
- (廿一) 杉澤及與板の戦



(廿二) 今町の戦

(廿三) 福島方面の戦

(廿四) 長岡城恢復

(廿五) 長岡城再び陥る

(廿六) 新發田藩の反覆

(廿七) 加茂の戦

(廿八) 津川方面の戦

(廿九) 白河口の戦

(三十) 榑倉の戦

(卅一) 平の戦

(卅二) 東軍白河を道羣す

(卅三) 三春藩の降伏

(卅四) 本宮の戦

(卅五) 二本松城陥落

(卅六) 相馬方面の戦

(卅七) 東西兩軍の勢

會津史卷八目次終

會津史 卷八

耕雨 關場忠武 閱  
相城 池内儀八 著

第六章 下谷保公の佐幕

(十三) 會津の決心

此時に當り我會藩は容保公の誠意達せず事情通せず徒に薩長の愚弄する所となり爰に列藩の應援を得て遂に薩長と正邪直曲を干戈に問ひ以て衡を争ふの止むを得ざるに至れり因て一藩皆勇氣勃發義膽鐵石の如く力を協せ心を一にし敢然封境を固鎖せんとす乃ち一藩を長幼により玄武(五十歲)青龍(三十六歲以上)朱雀(十八歲)白虎(十五歲)の四隊に大別し更に其一隊を數番に分ち又之を士中寄合足輕の三隊に分つ而して我士秋月登之助は

會藩薩長の諸軍を掃ふて赤心を天聽に達せんとす

武玄青龍 朱雀白虎の四隊

會津史 卷之八 池内日彌見

大砲進撃 遊擊敢死 結義誠志 新練衝鋒 奇勝後衛 の諸隊

幕兵農兵 會藩諸隊 封境を固 鎖す

江戸の脱兵數百人を率ゐて來り、幕士大鳥圭介、古屋作左衛門、沼間慎一郎等各募兵數隊を將て、會津に販す、亦別に大砲隊(山川大藏、小原

宇右衛門、井深數馬、市遊擊隊(三宅小左衛門、遠山伊新、遊擊隊(佐藤綱

岡守衛等之を率ふ、進撃隊(門等之を率ふ)、敢死隊、結義隊(大竹主計、渡部英、奇勝隊

率ふ)、草風隊、順風隊、別楯隊(蓋野右兵衛、集義隊、純義隊、誠志隊、士官隊、新

練隊(土屋鐵之助、衝鋒隊(大庭恭平等)、會義隊(野田進等)、後衛隊、猪苗

代隊(田之源之進、正奇隊(杉浦藤八郎)、別撰組、諸生組、幼少組、農兵等

ありて各其一隊を又數隊に分ちたり、而して先づ砲兵隊長山川

大藏、朱雀一番士中隊長田中藏人、別撰隊長小山田傳四郎、朱雀二

番足輕隊長櫻井彌一、右衛門等をして南口(下野)に、砲兵隊長市岡

守衛、朱雀四番士中隊長佐川官兵衛、全寄合隊長西郷刑部、朱雀足

輕隊長宮下藤太、新遊撃隊長佐藤織之進、遊撃隊長三宅小左衛門、

結義隊長渡部英次郎、衝鋒隊長大庭恭平、青龍三番士中隊長木本

東西兩軍 の戦客

慎吾、及井深宅、右衛門、萱野、右兵衛、古屋作、左衛門、池上、武助、町野、源

之助等をして越後(口)西方面に、一番砲兵隊長小原宇右衛門、青龍

一番士中隊長有賀惣左衛門、青龍二番隊長蜷川友次郎、青龍士中

隊長武井寛平、立武一番士中隊長遠山舍人、遊撃足輕隊長遠山伊

左衛門、新練隊長土屋鐵之助、會義隊長野田進、朱雀二番士中隊長

小森一貫齋、朱雀一番寄合隊長一柳四郎、左衛門、及ひ家老横山主

税、西郷頼母等をして白川(口)東方面に、前後會津を出發し、各其要

地に據て薩長の兵を防がしむ

是に於て、會津は仙臺、米澤、莊内、南部、二本松、三春、棚倉等、二十餘藩

より成りたる、東軍の主働者となり、兵を北越、總野、磐城、仙道の國

境外に出して、同盟の諸藩に應援し、以て一面は西軍の越後より、

會津及米澤、莊内に進入するを防ぎ、一面は西軍の白川、口より、會

津及仙道を蹂躪して、仙臺に進入するを禦き、尙後方の北面は、米

澤莊内等と力を合せて、奥羽駐在の西軍を驅逐し、而して南方の  
前面は其北越にあるものと、奥羽に向ひたるものを兩斷分離し  
て、其歸路を塞ぎ糧道を絶ち、以て北方より猛烈なる攻勢を取り、  
一舉南進、西軍を粉砕して關東を畧し、秋田津輕の諸藩をして、我  
か同盟に加はらしめんとす。若し又遷延敵と對持するも、漸く冬  
季に至らば、則ち嚴冬積雪、西軍必ず困み、兵氣漸く沮喪し、我軍奮  
進、江戸を衝くに至らん。之れ則ち會津の戰畧なり。西軍に於ては、  
先づ首軍をして北陸を畧取し、一は會津に入り、一は秋田津輕と  
合し、以て我を此方面に牽制し、別軍をして此間に乘じ、總野を進  
んで、白河口より仙道を畧取し、會津諸道に備へて、直ちに白石を  
占領し、以て奥羽列藩の同盟を分離せしめ、仙臺諸藩の南進を防  
ぎ、次で會津に入らんとす。而して又別に中間の一軍をして、會兵  
の總野に突出するを防ぎ、秋田津輕の諸藩をして西軍に應じ、我

後背を衝かしめんとす。之れ則ち西軍の戰畧なりと聞く所なり、

(十四) 北越同盟

是より先き、慶應三年、幕府の政令振はざるや、西軍諸藩其衰弱に  
乘して、之を斃さんとし、危機の漸く切迫するに従ひ、薩長の過激  
壯士、多く北越地方に遊説し、竊に我會津の形勢を偵ふもの、如  
く、過機潜伏、北越諸藩皆安からず、殊に新發田藩は、當時天下の勢  
相逼り、遂に其東西の相衝突せんとを憂ひたり、  
抑新發田は、越後の東北なる一隅に偏する小藩にして、其地勢も、  
亦自ら會津の下風に立たざるべからざる位置にあり、而して彼

は、中古戰國時代に於ても、越後の津川方面を屬領とせし、我會津  
に款を送りて、上越後高田地方に雄視せる上杉氏に従はざりき、  
又毎に關東或は奥州の各地に赴かんとするときは、必らず途を  
我會津に取るを至便とす。故に今又彼は、北越地方に過機の伏す

北越の形勢

新發田藩の形勢

るを憂ひ、竊に使節を我會藩に遣はし、左の如き書を示して救援を乞へり、

此度ひ罷出候者、別儀に御座なく、御當節、世上一般人心穩かならず、何方も如何様の變事出來申すべくも計り難き時節にて、御同様心配の折柄、取留めざる事なから、越後筋に於て容易ならざる風聞之れあり、正義黨と唱へ、浪人、京都、關東、越後に多人數潜伏致し居候由の處、右謀策は越後地の儀、米穀豐饒の土地に付、巢窟を高田村上兩所の内に定め、江城を火にし、會津を攻め落し、横濱へ打て出、長州よりは京都へ切込み申すべき手配。借て右黨に於ては、朝廷の手を借り申さずでは、賊兵に落ち、且つ諸人信仰も薄く候に付、有栖川宮様の公達を招請致し、長州を始め、其他一味の諸侯、人數を分け、一手は軍艦にて海上乗り廻はし、越後瀨波へ着岸、宮様は様を替へ、陸地御下りにて、同時

に落合村上城を借受け、不承知の節は干戈を動かし候手段、村上城借用の上は右宮様を引移し、夫より米澤へ使者を以て軍勢繰り出し、申遣はし、越後並に所々に潜み居候。正義黨の者、一時に起り立ち、動搖の圖を見て、諸侯に正義を解諭候手段、軍用金兵糧等の繰り出しは、京、大坂、江戸、越後筋身元のもの、を自黨へ引入る、聊の差支へ御座無く候由、正義諸侯方御家來の内、二百人、百人と追々右黨へ加はり候。總裁は、有栖川宮様、御差配にて、指揮之れある由申唱へ居候由、右黨のもの、専ら御當所をねらひ、當三四月頃には必ず事を發し候企の趣き、追々相聞へ、右は取留めざる風聞には御座候得共、容易ならざる儀と申し、探索致し見候へば、右黨のもの、諸國へ潜伏致し居り、越後筋には餘程入込候儀は相違御座なくやに相聞へ、右風説の趣は御承知も御座之あり候や、万々一變事に於ては、相濟まざる次第、不

安堵至極御許様の義は越後地に御新領並に御預所も御座候に付、御探索筋は勿論、何等の御手配等も御座あるべく候哉。此節、御取締向等も御座候は、御内々御模様相伺申度、右は當方最寄御料領御取扱等も之れ有るべくやの處、餘の儀と違ひ輕卒に御發し相成り難き義に之あり、假令浮説の事に致し候ても、小家の義、黙止居候ては、不安堵の次第已むを得ず、御許様の義は、舊來より御懇示成下され、毎度御手厚の御仕向けを蒙むり居候義に付、聞込候趣き聊か斟酌致さず打明し御談し申上候間、何卒腹藏なく、御示教成し下され度、此段幾重にも御纏り御頼申上候。

會津北越諸藩に遊説して同盟す

是に於て、我公は藩士土屋鐵之助、萱野安之助、飯田兵左衛門を遣はし、村上、村松、新發田、長岡の諸藩を説きて曰く、今や天下の危機切迫し、浪人往々越後に入り、奇言暴行、万一の變不測に發せんも知るべからず、故に各藩聯合して以て一致の方向を定むるは、今日の急務なるべければ、九月十五日を期し、新潟に於て、北越諸藩の會合を催し、將來の方嚮を議せんと、而して長岡藩をして柏崎、奥板、高田、糸魚川、七日市、三日市等の諸藩に談判せしめ、各藩の賛成を得、九月十五日、奥板藩を除くの外、十三藩皆會合し、十八日左の如き約定書を議決し、以て同盟誓約をなせり

- 一、 銘々領内の儀、嚴重取締致探索候次第柄は、集會の節打合可申事。
- 一、 毎年五月十四日迄に參着、十五日出會の事。
- 一、 事の有無に拘らず、毎年九月朔日糸魚川村上の兩藩より廻狀差出し各藩順に差添可送事。
- 一、 變事有之節、其次第柄、飛脚を以て通達可致事。  
但、不差急儀は、不時廻狀を以て、通達可致假令風説たりとも、品に寄り心得の爲め廻達可致事。
- 一、 他領たりとも、何儀によらず、浮説等有之、實事承り置度儀は、出會前、の役筋へ承合可申事。



會津松平肥後守家來

柏崎松平越中守家來

高田(彌原式部大輔家來)

長岡(牧野駿河守家來)

新發田(溝口賊之進家來)

村上(内藤豊後守家來)

五泉(水野出羽守家來)

七日市(松平伊豆守家來)

三根山(牧野伊勢守家來)

糸魚川(松平日向守家來)

三日市(柳澤彰太郎家來)

椎谷(堀右京亮家來)

黒川(柳澤伊勢守家來)

堂田兵左衛門  
土屋安之助

手塚基太夫  
阿部庄太夫

前田太助  
杉本兵衛

白井門左衛門  
小川貞右衛門

武川善右衛門  
七上節助

石井左兵衛  
水谷孫平

寺田信三郎  
細村哲三郎

鈴木三郎  
鈴木三郎

石塚五郎右衛門  
竹島義助

小口佐右衛門  
赤松政治

安野和右衛門  
押見三左衛門

木刀川大郎  
木村大郎

(十五) 長岡藩の義烈

長岡藩朝  
廷に建白  
す

北越諸藩の中、長岡は、士風勁健、節義を重んじ、廉耻を尙び、毅然と  
して、信濃河畔の堅城に據り、要路を扼せる有力なる一藩なり。藩  
主、牧野備前守忠訓、文久二年に所司代となりしが、次て之を辭し、  
將軍慶喜公の政權を奉還し、人心洶々たるや、朝廷の命に因り、京  
師に入り、奏する所あり、其文中に云ふ、

殊に嘉永以來、外國渡來、和戰之兩議より、公武之御間柄、彼是を  
生し、時論不定、姦雄其虚に乗じ、巧に尊王の名を借り、浮浪之激  
徒、無深長之慮、狂暴釀亂、幾人どなく、非命に陥り、候次第、慷慨決  
死之心、底は可憐事に候得共、全く一心の私憤に出で、義理の當  
然、國家治安之道を不辨、不好犯上、而好作亂者、未有之、と、浩歎之  
至に、御座候。爾來物情紛々、世上不穩、續而長防之事件も相起り、  
終に今日に至り候者、可悲事に御座候はずや、外國和戰之儀、天

下之諸侯種々異説も御座候得共、追年事情も相分り、既に先帝御治世之砌、交際御許にも相成、唯今に至り候ては、始め攘夷を唱へ候者も、反て彼と和親に及び、今日之形勢、徒に攘夷の出來ざるは、分明仕候儀。然ば則ち朝廷にも、先後之御命令御通徹と申御儀にも、無之、乍恐御反省可被爲在事と奉存候。惣て朝議より出候而已にも、有之間敷、尊王之名に托し、攘夷攻戰を唱へ候輩より多くは、此に至り候御儀と奉恐察候。是等之人々、只今に至り、猶攘夷を唱へ候哉、自己之明暗を不省、先後之反覆を不耻して、徳川氏而已に責を歸し候者、仁義有道之人々と可申哉。

之れ長岡藩が尊攘派の皮肉を發き其行爲を非難せしものなり、當時如何に薩長が權力大にして威焰熾んなりと雖も、爾來彼が幕府の開港を怒りて、京師をはしめ至る所、暴横を極めて目的を貫かんとせし攘夷説を豹變し、却て徳川氏を谿壑に陥れて、己れ

長岡藩の方向

等一二雄藩のみ、朝廷を擁して天下を計るは、騷亂の基となるや、赫灼として明なり、長岡藩の憂ふる所實に此處にあり、朝廷をして攘夷説を固執せしめたるものは、薩長攘夷家の罪なり、猥りに外國と干戈を交へ、無謀の攻戰を開き、我帝國をして危殆に陥らしめんとせしは、薩長尊王家の過なり。

時に長岡藩の熱血を灑きたる建言も、薩長の威焰熾んなるを以て、省せられず、因て慶喜公大坂城にあるを以て、慶應三年十二月廿九日大坂に入る、次て四年正月、伏見鳥羽の變に遭遇し、伊勢より三河に渡航し、東海道を経て江戸に歸り、三月、領地に就き、封土を鎮撫し、士民を安んず、時に討幕討會の師起り、北越各藩に出兵の命下る、是より長岡藩議論二派に分れ、一は恭順出兵を主張し、一は之に反對す、然るに西軍北越の境に臨むと聞き、一藩の意衷を懇へて、領内を鎮撫し、恭順するも兵を出すを辭し、朝廷に忠に、

長岡藩開戦に決す

徳川氏に義を失はず、以て獨立の實を全くすべしと兩派合同す、而して領民安撫の爲に、兵を各地に出して不虞を戒しむ。閏四月、西軍の先鋒、長岡を去る四里小千谷驛に至ると聞き、重臣河井繼之助をして藩の意衷を陳じ、大義の在る所を述べしも、聽かれず、尾州、加賀の諸藩に、其周旋を乞ふも肯せず、繼之助歸りて、其西軍の薄忍なるを全藩に告ぐ、是に於て、全藩の士風、勃焉として奮興し、先きの恭順派も速に向背を定めて、西軍に抗せざるを悔い、其勢制すべからざるに至る。因て河井は國老山本帶刀と謀り、川嶋億二郎を擧げて、軍事掛兼奉行となし、諸隊長を集めて之に謂て曰く、王師は戦を好み、民を苦むるものに非ず、然るに今や薩長の兵、漫に兵威を弄し、一意人の境に臨み、我藩を脅制し、不義に陥らしむ、是れ豈王師の名を藉りて、以て私怨を逞くする賊師に非ずや、彼れ若し我に向て砲を發せば、則ち我亦之に應戦せざるべからず、諸君國家の爲に奮て隊下を鼓舞し、賊師を逐攘せよ、と諸士皆憤慨奮て力を軍事に盡し、誓て國事に死せんとを期す、會津の將士亦兵を率ゐて來り援く、

西軍北越を奪す

越後に入りたる西軍は、薩、長、甲、信、加、越の兵にして、高田を以て集合地となし、閏四月十九日、全軍を分ちて、一は右方の山道を進み、長岡を経て奥羽に入らしむ、乃ち薩、長、高田、尾州、松代、飯田等の諸藩兵之に屬す、一は左の海道を進み、新潟を占領して、奥羽に入らしむ、乃ち加賀、富山の兵、及薩、長、高田の別隊之に屬す、廿六日、右軍堀田浦佐六日町に達す、時に幕士古屋作左衛門、歩兵六百人を率ゐて會津より越後に入り、轉じて信州に至り、飯山城を圍みければ、飯山藩援を松代尾州の兵に請ひ、拒き戦ふ、古屋亦兵を指揮して激闘せしが、他に應援なく、衆寡敵せず、柏崎、安塚、十日町地方に

(十六) 小千谷方面の戦

信州飯山の戦

十五 地内氏藏版

李阪の戦

退く、是より先き、三國峠を保ちし我會將町野源之助、池上武助、出て、小出島に陣し、兵を堀田、浦佐、六日町等の近傍に散布し、西軍を討たんとす、又會將井深宅、右衛門は、小千谷に進まんとする西軍と芋阪に遇ひ、自ら正面に當り、古屋作、右衛門及び會將桃澤彦次郎を左右翼となし、激戦、高田、尾州の兵を破る、時に高田の別隊來り援ひ、我側面を撃つ、因て退きて雪峠の險に據り、保壘を山腹に築きて亂射し、高田の本道兵を斥く、已にして松本、尾州、松代の兵、三面より攻撃す、我兵遂に支ふべからざるを知り、小千谷に退く、此夜亦兵を率ゐて片貝に退き、柏崎の我軍と相通ず、廿七日、拂曉、小出島の我兵、薩長の軍と開戦し、一を以て十に當り、奮激突進、大に西軍を苦しめしが、亦衆寡敵せず、六十里越に退く、此日西軍の左軍は、小千谷驛に達し、本營を設く、

(十七) 桑名藩の決心

小出島の戦

桑名藩越後柏崎に據る

鯨波の戦

是より先き、桑名藩主松平定敬、伏見の敗後、江戸に下りしが、桑名の領地は已に西軍の占むる所となり、徳川氏は恭順せしを以て、家臣百五十餘名と共に、越後柏崎に來り(柏崎は領地の一)勝願寺に恭順せり、此時伏見の戦に従ひたる岡本武雄、及町田老之丞、松浦秀八、立見鑑三郎(尙文)馬場三九郎等の主戦黨、江戸に留り、形勢を窺ひしが、之を聞き、柏崎に馳せ至り、恭順論を壓倒して、抗戦に決せしめ、本營を柏崎に設け、兵を出して其封疆鯨波驛を守る、廿七日、長將三好軍太郎(重臣)之を聞き、加州、薩州、松代の諸藩兵と共に來り遁る、桑將松浦秀八、僅に半小隊を以て之に當り、小河内山及鬼穴山に據り、堡壘を築きて猛撃す、西軍亦後援を得、奮戦山上の我兵を驅逐せんとす、偶立見鑑三郎、町田老之丞等、諸隊を率ゐて來り援け、縦横激闘、西軍を摧く、西軍即ち鯨波を占領する能はず、火を青海川驛に放ちて、鉢崎驛に走る、然れども我軍其兵寡

水戸の市川隊等出る雲崎に據る

く西軍を追撃する能はず、加ふるに小出島の敗報を得たるを以て、廿八日、柏崎を退き、妙法寺驛に至り、壘を築きて之を守る。時に水戸の一黨、朝比奈彌太郎、市川三左衛門等、兵數百を率ゐて出雲崎に屯し、諸道の東軍に應援せしを以て、會桑、慕水の兵合せて一千餘人に至り、軍氣亦振ふ。

(十八) 片貝方面の戦

塚山鴻巢の戦

西軍なる山道の右軍は、悉く小千谷に集合し、海道左軍は、柏崎に達して本營を此に置き、始めて相聯絡せり、而して片貝地方に據りたる會桑、兩藩兵は、塚山、鴻巢、及び本道に出で、柏崎及び小千谷、兩方面より來襲の西軍に備ふ。五月二日夜半、會の砲兵隊長市岡守衛、砲二門、兵若干を率ゐ、會津より來りて之を援く。三日拂曉、高田の兵は、右方小千谷本道より、尾州の兵は、左方坪野村より進み、上田及び飯山の兵は、柏崎より、塚山の我軍に向ふ。是に於て

會將佐川市岡等の勇戦

東西兩軍の砲聲、山野を動かし、硝烟天地を蔽ふ。已にして我土屋隊、散兵を以て敵を横撃し、各方面の戦方に酣なり。時に會將佐川官兵衛、兵を小千谷、柏崎の二道に分ちて來援し、憤戦激闘、殊死して敵を衝く。東軍之がために勇氣十倍、會士原幾馬、星野恒之進等、挺身して敵と格闘して克ち、已にして西軍敗れて走る。東軍兵を集めて息ふ、暫くして尾州の兵急に返して我背後に逼り、高田の兵亦本道より逼る。我軍勇敢善く戦ひ、高田の兵を破りて將に尾軍を破らんとす。偶々薩長の大兵馳せ來り、本道より突進して我背後を襲ふ。是に於て、東軍利を失ひ、軍夫は皆散亂してあらざるを以て、將士各彈藥箱を荷ひ、砲車を引き、夜半與板脇の町方面に退き、四日長岡に至る。藩侯之を勞して酒饌を與ふ。次て西軍も亦小千谷に退く。

(十九) 榎峠の戦

長岡隊の  
進發

六日、山道の西軍勢に乗じ、一隊を以て妙法寺口を固め、本隊は信濃河を渡り、榎峠の道路を扼せり、已に主戦に傾きたる長岡藩は、其西軍の榎峠に據り、長岡に逼る近日にあるを知り、五月十日、軍事總督河井繼之助は、軍事掛川島億二郎、及ひ大川市左衛門、波多謹之丞、田中小文治、牧野八左衛門をして、各一隊を率ゐて本道より、共に榎峠に進撃せしむ、此時會將佐川官兵衛、市岡守衛、萱野右兵衛も亦兵を率ゐて之を援く、是に於て、川島の隊は先づ直前突進、西軍の據れる古城趾の壘を奪ひ、其他の東軍次で榎峠、旭山の險を占領す、西軍退きて浦柄、鐵坂、三佛生を守る、十一日、長岡安田多膳、兵を率ゐりて大川隊に代り、我會將萱野右兵衛の兵と共に、旭山上より敵地を砲撃す、而して西軍の援兵、信濃川を渡りて益増加し、巨礮を劇射すること甚しく、勢威大に張る、會將市岡等亦妙見に砲隊を陣し、應戰して敵壘を摧くと前後二回、會將佐川

榎峠旭山  
の戦

妙見六日  
市の戦

西軍の將  
山縣狂介  
等榎峠を  
襲ふ

は壘を六日市に築き、三佛生の上田、松代の兵を横撃して、我砲隊を援く、西軍色少しく沮む、榎峠の東軍亦險隘に據り善く戦ふ、西軍之を以て勢窮して進撃する能はず、十二日の夜に至り、西軍の將山縣狂介、有朋、時山直八等、三佛生に在りしが、相議して榎嶺を占領せんと欲し、時山は先づ手兵二百を率ゐて旭山を牽制し、山縣は直に榎峠を撃たんと約す、時山乃ち斷崖を攀ぢ、竊に旭山の我安田隊に逼る、安田隊戦に憊れ、備を嚴にせず、且曉霧冥濛、咫尺を辨せず、其敵襲を知らず、砲聲起るに及び俄に戦備を整へ、防戦すと雖ども、事不意に出て甚だ苦しむ、時に安田隊の左右壘を守れる、會桑の兵來り援く、已にいて西軍壘に逼り、縦横入り亂れ、劍を閃かし、銃を振ふて、搏戰接鬪す、東軍遂に時山を斬り、機に乗じて猛進し、大に西軍を破る、西軍走りて身を谿谷に轉じて死するもの算なし、東軍凱歌を發し、三嶮の軍

西軍の將  
時山直八  
旭山に戦  
死す

之に和す。山縣の軍遂に目的を達する能はず。是より兩軍の砲戰日夜益激烈を極めて十八日に至る。而して連日の霖雨にて河水汎濫船の渡るべきなく、西軍更に進撃する能はず。

(二十) 長岡城陥落

然るに西軍の諸將、小千谷の本營に會し、策を建て、曰く、榎峠の險は容易に抜く能はず、宜しく東軍を此地に支へ、別軍を左翼より迂回し、敵背に出て、長岡の虛を衝くべし、果して然らば榎峠の東軍戦はずして走らんと、薩長の兵を以て迂回兵となす、此時に當り、東軍の勢威益振ひ、長岡の河井、川島、會の佐川、桑の山脇等、相議し將に小千谷を襲ひ、西軍をして首尾を顧みるに違あらざらしめんとす。

十九日、西軍は密に迂回して長兵は古島より、薩兵は横下より、信濃川を渡り、曉霧に乗じて進む。是に於て此方面を守備せる長岡

西軍迂回  
長岡の虛  
を衝く

長岡落城  
藩主枋尾  
に走る

米澤新發  
田の兩藩  
出兵す

兵防戦せしが、其不意に驚き長岡に退く、西軍勢破竹の如く、市街の要所を占領して城に迫る、長岡の東軍遂に藩主を奉して枋尾に退く、西軍乃ち城に入りぬ、是より先き、妙見口の東軍は、漸次戦線を擴充して、西軍を苦しめ、將に小千谷に迫らんと欲せるに、此日拂曉、長岡の方面に當り、黒烟天に漲り、砲聲地に震ふを見聞し、使を馳せて事實を探らしめ、始めて長岡城陥りたることを知り、各隊半藏金森上等に退く、此時に當り、東軍、北越第一の關門たる長岡を失ひ、切齒憤慨、再ひ兵氣を鼓舞し、戦備を整へ、必ず長岡を回復せんと欲す、又米澤藩は、上杉主水をして兵を率ゐて北越に至り、村上藩と共に合して新發田を圍み、出兵を促す、新發田依違決せず、兩藩怒り之を屠らんとす、我會藩其間に斡旋し、遂に新發田をして兵を出さしめ、共に進て如茂に陣す、實に五月廿三日なり、長岡の兵之を聞き、藩主をして難を會津に避しめ、而して河井等

佐川隊杉澤に戦ふ

兵を率ゐて加茂に退く、加茂は長岡を去る八里の地なり、

(廿一) 杉澤及與板の戦

次て會將佐川、市岡は、長岡落城後、半藏金等より、杉澤に留まりしが、薩長及ひ加州の兵の進み來るに會し、之と戦ひ、一を以て十に當り、奮撃せしと雖ども、支ふる能はずして退く、此日、佐川隊小隊長多賀谷勝之進、彈丸雨飛の中に立て、神色自若として、指揮勇戦し、部下皆死を決して奮闘せり、是に於て、加茂の東軍、軍議を盡し、進んで枋尾の西軍を撃ち、互に勝敗あり、

東軍與板と占領す

是より先き、會將木本慎吾、萱野右兵衛は、桑名村上の兵と合し、五月廿四日、加茂を發し、廿六日、大河津の海道の西軍を破り、金崎を襲ひ、奮進して荒卷に至る、西軍險に據りて之を固守す、我軍間道より襲ふて亦之を破り、勢猛虎の如く、突進して塔浦の西軍を敗り、元與板に逼る、薩長、富山、須坂、飯山の西軍、殊死して防戦せしが、

島崎の戦

遂に支ふる能はずして走る、是に於て、東軍元與板を奪ひ、大山の西軍を攻む、適ま羽前上の山藩士松平誠之介、一隊を率ゐて來り會し、勢大に振ふ、廿八日、味爽、西軍進んで元與板に薄る、我兵撃て之を斥く、六月三日、西軍、高田、富山等の兵、與板口北野村に陣せる東軍を衝んとするを聞き、會藩士の寺泊驛に在るもの、兵の招集に違なく、觀音寺村の賭魁勇次郎が徒數十人を率ゐて、途に要撃せんと、馳せて之に赴く、偶ま西軍島崎驛佛寺に入て餐を傳るを見る、乃ち銃丸一發の下、刀を抜て突進佛寺に入り、縱横奮戦、富山の隊將關澤某及五六人を獲たり、餘兵披靡して退く、之を以て桑名莊内兵を出せしも一兵を見ずして歸る、

是時、山道の西軍は今町に本營を置き、海道、西軍は出雲崎に在り、而して海道、東軍は彌彦を根據として、山道の東軍は加茂三條を根據となす、而して東軍の將河井は、進んで今町の官軍を撃



破し、然して後長岡城を復さんとす、

(廿二) 今町の戦

今町の戦  
長將三好軍太郎督戦す  
會將佐川長岡の將河井突貫敵壘を抜く  
島崎方面

六月朔、長岡の諸隊は加茂を發し、二日拂曉、會の衝鋒隊、及佐川隊、市岡隊と共に、今町の三面より進む、西軍の本營急に命を諸藩に傳へて、逆撃せしめしが、東軍の勢猛烈當るべからず、間道の長軍先つ敗れ、左翼尾州の兵、亦東軍の銃鋒に支へず、狼狽して走る、正面の西軍亦砲臺を棄て、退くこと數町、長將三好軍太郎一隊を以て來援し、勢を得て再ひ返戦す、砲烟滿天、彈丸雨射、互に屍を築きて戦ひ、勝敗未だ決せず、佐川、河井と相議し、令して曰く、此堅壘を抜く尋常の手段を以てすべからず、直前突貫、以て敵兵を搏つべし、と銃戰を禁じ、數十歩堤上を急進して、堤腹に息ひ、漸く敵壘に迫らしむ、諸隊皆奮進、壘中に突入す、西軍遂に敗走し、右翼も亦敗る、是に於て、三面の東軍今町に入り、敗兵を追撃す、此日、海道の

の戦

大口村の小戦  
持立峠の小戦  
押切村の小戦  
福井村の小戦  
大黒村の小戦

西軍出雲崎より進んで、島崎方面に出てしが、亦東軍の來襲に遇ひ、苦戦の後辛くして出雲崎に走れり、是より先き、我藩公は兵を率ゐて會津城を出て、越後街道なる野澤に至り、北越方面の東軍に聲援せり、

(廿三) 福島方面の戦

東軍は、戦捷の勢に乗して益陣を進め、本營を見附及び今町に置き、左翼は枋尾、右翼は彌彦に至る、  
七日、東軍大口村の壘を攻めて、抜く能はず、此日市岡隊士官原幾馬奮戦して死す、八日、枋尾の東軍持立峠の西軍を撃ち、壘固くして、抜けず、十一日、押切筒場の壘を襲ふ、亦抜けず、十二日、出雲崎の西軍進んで齋頭を占領す、十三日、佐川隊、市岡隊、米澤の一隊と、福井村に於て西軍と會戦し、之を斥く、小隊長多賀谷勝之進飛丸に中りて仆る、時に年二十、此時、東軍は福井及び百束村に、西軍は大

平石村の  
小戦

黒及び福島村に、堡壘を築きて相對せり、十四日、長岡の將横田大助、三間市之進、會將木本慎吾等、大黒を襲ふて富山、高田の兵を破りしが、西軍の援兵來り援ふに會し、福井の壘に退く、

此日、長岡米澤の兵、土谷を出て、平石等の大垣兵を撃破し、其砲壘を奪ひしも、長州、松代の兵來り援ふに遇ひ、土谷に退く、

廿二日、會の佐川隊、市岡隊は、米澤、長岡の諸隊と、福島村の西軍を撃ち、進んで長岡に入らんと欲す、乃ち長岡兵は、先づ潛行して福島村に火を放ち、而して諸隊共に此機に乗じて、敵軍を衝かんとを約す、已にして夜半、果して火福島村に上る、是に於て、全軍進んで其本營を襲ふ、富山の兵狼狽驚愕、兵器を委て、走る、東軍進んで將に長岡に入らんとす、各地を守備せる西軍、福島の火光を見、死を決して來り戦ふ、兩軍の奮闘激戦、龍怒り、虎吼ゆるの状あり、東軍遂に抜く能はずして、福井百束の壘に退く、此酣戦中、我砲兵

福島の戦

半藏金の  
戦

隊長市岡守衛は、田中覺之進、澁谷源藏、馬場文藏、本郷次郎、渥味忠右衛門を率ゐ、大黒村に潛行し、火を放ちて敵營を焼き、以て福島の西軍を牽制せんと欲し、暗夜に乗じて敵地に入りしも、燧具連日の雨濕に用をなさず、遂に敵の哨兵に誰何せられて戦を開き、其圍む所どなりしが、一方を衝て福井に歸れり、此時隊長市岡股に傷き、中澤志津馬之に代る、

此日、會將井深宅、右衛門は、米桑の別隊と共に、田口、中野侯の壘を發し、半藏金の西軍を攻撃して、尾州兵を破りしが、長州、松代、松本の大兵來援せるを以て、田口、中野侯に退く、

七月朔、西軍土谷に襲ひ來る、我兵防戦遂に退く、持立峠の東軍は、會津、村松、長岡の諸兵にして、土谷と連絡を通ぜしが、亦西軍來襲の急にして、亦退かざるを得ざるに至れり、而して福井、百束の米澤兵、長岡隊の應援を得て、大黒の西軍を襲ひ、富山、高田の兵を撃

土谷持立  
大黒各方  
面の戦

藥師の小

退せしが、薩長の兵應援最も力め、我兵遂に壘を棄て、退く。此日、各方面の戦甚だ激烈を極め、死傷百數十名の多きに至り、西軍の死傷亦之に倍せりと云ふ。河井は之を聞き、五日、諸隊の部署を定めて各地に進撃せしめ、自ら先づ薬師の敵壘を抜き、西軍を荷頃

西軍の援兵大に至る

(廿四) 長岡城恢復

是時に當り、東軍兵氣猛烈、専ら攻勢を取り、東軍は連戦連敗、防禦に汲々乎として、纔に其守地を失はざらんとを恐るゝのみ、是より先き、江戸に於ては西軍の振はざるを以て、諸藩に令して、赴き援はしむ。此援兵、七月十五日、柏崎に達し、此地を以て、本營となし、一軍を以て陸路の正面を進み、在來の軍と合して東軍を攻撃し、一軍を以て軍艦五艘に乗じ、新潟港に進みて東軍の背面を衝かんとす。而して廿二日を以て之が實行の期となせり。然るに會津

長岡城恢復ノ軍略

長岡の兵謀して之を知り、西軍の援兵未だ出發せざるに先ち、一舉長岡城を恢復して、益々進取の勢を張り、急に米山を踰えて突入猛撃し、西軍を北越より驅逐すべしと急に長岡進撃に決し、會の佐川、木本、長岡の河井、三間、川島、山本等十數隊を編制し、一は本道より、一は間道を潜行して、將に廿二日を以て死を決し、長岡に入らんとす。適ま烈風暴雨、溪流漲溢して進行し難きを以て、廿四日に延期す。廿四日、曉先づ長岡兵は間道より進み、米澤、新發田及長岡の大砲隊は、十二渦、大黒、福井口等を撃破して本道より進み、會兵は枋尾、荷頃より西軍を驅逐して持立に突入し、米澤の別軍は田井、浦瀬より進み、以て兩軍を夾撃せんとす。已にして間道の兵縦横奮迅、敵の要所を破り、長岡市街に迫り、總督河井自ら隊旗を揮り、彈丸雨飛の間より奮進す。適々流丸あり、其肩に中り、鮮血淋漓たり、兵士傍にあり、驚て曰く、總督丸に中ると、河井曰く、戰場

間道の東軍長岡に通る 東軍の將

河井飛丸に傷く

本道東軍亦長岡に進む

左右翼の東軍長岡を衝く

固死を期す、傷を蒙る何かあらんと、神色自若平生に異らず、忽にして飛丸又た左足を傷く、衆色沮む、河井大喝して曰く、我傷極めて、淺し、但た其傷足に及び、徒歩に便ならず、姑く板扉に搭して前驅せん、機會の來る間一髪を容れず、今日失すれば復來らざるなり、と辭色益壯なり、是に於て、兵氣奮勵、遂に西軍を走らす、本道の兵は勇を鼓し、突進して福井、大黒の壘に逼り、突貫すると殆ど三回、西軍亦最も力を此方面に注ぎ、烈戦甚た力む、廿五日に至り、遂に東軍の驕勇に當る能はず、倉皇先を争ふて退く、十二湯の敵壘は、亦米澤、新發田の兵の抜く所となり、廿六日の天明に至り、漸く長岡に達す、枋尾の會兵等は、廿四日の未明、土谷、荷頃方面に潛進し、皆銃を捨て、刀を揮ひて、兩軍の壘壁に闖入し、連戦連勝、廿六日までに廿三壘を陥れて、長岡に進む、西軍狼狽逃路を争ひ、谿谷に投し、斷崖に落ちて死するもの算なし、時に長岡城の西軍、市街の

東軍長岡城に入る

西軍長岡を抜く

要路を扼し、殊死拒戦せしが、支ふる能はずして走る、是に於て、長岡城再び東軍の有となる、東軍機に乗じて敗兵を追撃し、斬擄擧げて數ふべからず、  
此時、西軍の兵氣萎靡振はずと雖も、東軍亦連日晝夜の激戦に一睡するを得ず、疲憊殊に甚しく、加ふるに河井、渡部、大川等の諸將多く死傷せるを以て、進撃するに遑なく、纔に附近の敵兵を斥けて長驅突進する能はさりき、

(廿五) 長岡城再び陥る

廿九日、西軍漸く援兵を得、兵氣を鼓舞激勵し、曉霧に乗し各方面より長岡に襲來す、東軍死力を以て拒くと雖ども、敵兵益加り、勢愈熾にして其鋒當るべからず、會將横山、傳藏、朱雀隊を率ゐ出て、本道口を固守し、激戦奮闘、硝雲漲り、彈丸雨飛し、礮聲雷の如く、發火電に似たり、已にして其兵半ば殲くると雖も、猶屈せず止り

出雲崎方面東軍の形勢

河井會津に入り創を病みて死す

戦ふ時に諸方の守備皆敗れて走る、是に於て、城中使を横山隊に派し城に入らしむ、横山隊乃ち退きて城を守る、此夜、東軍城を支ふる能はざるを知り、一は枋尾方面に退き、運場、吉平間に壘を築き、八十里越の會津街道を守り、一は加茂、三條方面に退く、此戦、新發田遂に西軍に降り、次て其先鋒となりて進む、此時、與板、出雲崎口を守備せる會將中澤、志津、馬、水、戸、市、川等の東軍は、勢熾んにして將に西軍を撃退せんとせしが、長岡落城を聞き、地藏堂、彌彦を棄て、亦加茂三條に退て合す、

廿五日、長岡城を陥るや、總督河井は銃傷甚た重り、自ら軍事を督する能はず、藩醫をして之を療せしめしが、此日長岡城危急なるを以て、疾を力めて軍を視、諸兵を勵まして奮戦す、其敗るゝや、留まりて戦死せんとす、左右の諫止する所となり、枋尾に退き、後事を三間市之進に囑して、八十里越より會津に入り、只見村に駐ま

る、容保公、幕醫松本良順をして診察せしむ、松本曰く、病毒骨に入り、切斷せざれば、全治するなし、と然れども、其施術の器械を携帶せざるを以て、若松に伴ふ、六日鹽澤村に至り、病草まり、遂に起たす、時に年四十二、容保公之を悼惜し、禮を以て、若松建福寺に葬る、建福寺は當時長岡藩侯の館せし所なり、此時容保公以下藩士皆會し、式莊嚴を極む、人、以て之を榮とす、後明治三年、遺族其骨を長岡に移葬す、長岡城趾、松聲、颯々、幽鬼、哭し、荒艸、亂離、血痕、腥き所、碑あり、之を讀めば、即ち河井の人となりを知るん、

故長岡藩總督河井君碑

陸軍中將從二位伯爵 黒田清隆篆額

河井の碑

安政己未、長岡河井君來、我松山、就先師方谷山田先生、請從學、先生方柄用、以不暇、教授辭之、君曰、吾欲學、先生作用、非區々質、經問文、先生偉其言、許之、余因得納交深信、其人偶儻、他日必有所爲、既

而海內多故。及戊辰之變。君抗王師戰死。余聞之驚歎。知其事必出不獲已。而悲其才有所不盡也。頃者君故舊相謀。將樹碑表遺蹟。徵余銘。舊誼不可辭之。據狀叙之曰。君諱秋義。稱繼之助。河井氏。其宅有喬松。因號蒼龍窟。世仕長岡藩主牧野氏。考諱秋紀。妣長谷川氏。文政十年正月元旦生君。君幼豪放。不勉學。嘗學騎。疾驅狂奔。不從師範。師叱下之。君不屈曰。騎知馳與止足矣。其不受人羈絆。往々如此。稍長折節讀書。然不修章句訓詁。唯大意至會心處。反覆朗誦終身不忘。常以經世自期。武術獨好砲。鍛鍊自得。命中如神。年廿五始遊江戶。執贊齋藤拙堂翁。及古賀謹堂。佐久間象山諸氏之門。會米鑑來浦賀乞互市。德川幕府處之失宜。海內騷然。藩主撰君爲參政屬。歸藩有所計畫。而執政不容遂辭職。自置田園。募義勇。令東上衛藩邸。尋欲自發。執政不許。欲學蘭書。知外情有故不果。安政戊午。考致仕。襲其祿百二十石。此年再遊江戶。翌年遊關西。從山田先生備

中凡一年。深服之。嘗謂余曰。吾歷事大家。不知其學如何。至活用事業。則莫我方谷先生若焉。遂遊長崎。接洋人。探外情而歸。此行君所得最多云。文久年中藩主爲慕老。召君爲公用人。君知時勢不可爲。勸主辭職不用。乃自辭歸藩。藩主亦尋罷。君自此弄文墨。耽奕棋。或豪遊觸藩禁。蓋皆出憤世之餘也。時幕府興伐長之役。君竊歎曰。恐吹毛求疵。慶應乙丑夏。刈羽郡民嘯集。將迫城下。藩主命君鎮之。君提十字槍。單身入衆中。懇諭畢。瞋眼厲聲曰。汝等不從。先殛我而先。我亦揮槍當之。衆相顧逡巡。遂謝罪而散。執政始知君才可用。此冬任郡奉行。尋兼町奉行。遂自參政陞執政。前後多所釐革。設懲役場。廢奴館。除信濃川船稅。改士祿。使上下無大差。抑門閥。戒奢侈。厲文武。賞罰嚴明。令行禁止。士氣大振。又長理財。從政僅二年。府庫充溢。倍舊。丁卯冬。大將軍還政。朝廷輒納之廢幕。君奉藩主西上。上書論其不可不報。先伏見役二日。諫德川氏止出兵。亦不聽。歎曰。時乎命

乎海內自此亂。不若退撫封民。東軍果敗績。君護主間關還江戶。撤藩邸歸長岡。明治戊辰三月也。閏四月。薩長諸藩奉勅征奧羽。一軍自越後進。會桑諸藩出兵防之。遂迫長岡共戮力。君峻拒之。自守封疆以待。征東監軍來駐小千谷。乃撤強兵。身穿禮服。單騎謁曰。今日是何時。外國窺四邊。而內戰自弊之。爲願使我藩自守。養民圖他。日以効。監軍素疑其與奧羽。悃請一晝夜。終不聽。乃歸會同志。謀曰。吾今自刎。請附首級以三萬金。報獻王師。以表赤心。則長岡或免矣。衆不可。時王師既侵畧封內。君乃憤然決意曰。我恭順不敢抗拒。而彼來虐無辜之民。是薩長賊耳。非王師也。可不禦乎。藩主乃以君爲執兵總督。始與會桑共據稷嶺。防戰十晝夜。王師不破。別遣一軍襲長岡。五月十九日。城遂陷。藩主逃會津。君聚敗兵于加茂。奧羽諸藩兵亦來會。遂進擊王師于今町。走之。兵氣頗振。乃置牙營于見附。王師既據長岡。互築胸壁。連亘數十里。橫斷北越。日夜砲戰。勝敗不決者。

五十餘日。城北有大澤。曰八町。會長霖潦水氾濫。王師懈警備。君圖暗襲。使人夜々測水量。且架棧蘆葦間。向轉陣山中。爲不知。豫定部署。蓄炬材。七月廿四日。水減棧成。乃報之奧羽兵。自率死士四百。冒夜徑澤。八面放火。鼓譟攻城。城兵狼狽不戰而潰。比天明。全復長岡。適王師亦期此晨。衝我牙營。豫聚精兵于見附。顧城中烟焰。驚愕廻戰。我兵當之頗苦。君乃馳援。飛丸中左肩。骨碎不能復指揮。而奧羽兵自背破王師。四散退數里外。然城兵聞君負傷。氣大沮喪。既而王師收敗繕殘。廿九日。四面來攻。城再陷。王師自此駸々進會津。所向無前。世謂君向不傷。東北平定。不知費幾歲月。或然。君療傷會津山中。不癒。以八月十六日歿。歲四十二。從者火化之。葬建福寺。後移葬長岡榮涼寺先塋。配柳野氏無子。以甥孫茂樹奉祀。君大願方面。眉秀而眼凸。爛々如電。或怒。決背人不能仰視。天資英敏。果決。一見洞人肺腑。排姦僞。不避尊貴。愛忠良。不遺卑賤。自信尤厚。不顧死生。不。

問毀譽事期必成而錯置縝密克耐艱楚言論爽快能辨拆是非一坐屈服平生每誦李忠定王文成之文李集其所手寫象山氏題簽之王集方谷先生所藏君請購之蓋喜其言涉經世也夙憂我國無海軍一日先生召余輩談時勢君曰秋義得志節國用購大艦任越海一方禦侮及為執政果有所豫備云夫長岡一小藩已而自任如此何其抱志之大憂國之深也不幸不死于外寇而死于內難是余所以深為國家悲之也銘曰

憂國讜議忠定奚耻學儒善戰文成惟似時乎不幸遭此亂離唯護民而何避躬危唯防賊已何犯王威確々心事天知地知

(廿六) 新發田藩の反覆

三條の戦

八月朔海道與板方面の東軍は新發田藩西軍に降り新潟方面西軍の有となり腹背敵をうくるを以て退きて三條を守る二日西軍三條を攻撃し進んで加茂の根據を衝かんとす其與板方面より

村松の戦

り退きたる東軍即ち會の中澤砲兵隊は庄内桑名水戸の兵と共に之を防ぎ奮戦して夜に入る隊長中澤飛丸に中りて死す後會士關清之進代て此隊を率ふ因て全軍加茂に退きて東軍の諸隊と合す加茂は當時東軍の根據なり適く警報あり曰く新發田藩西軍艦隊の兵を上陸せしめ一は新潟を畧し一は水原笹岡を破りて村松城を屠らんとすと三日會の砲兵隊村松城に赴き援ふ至れば即ち或は降り或は遁れ城中一の守兵なし時に西軍の已に五泉に進むと聞き將に赴き撃たんとす西軍之を探知し不意に進んで村松の我兵を襲ふ我兵苦戦竟に津川の間道なる沼越方面に退きたり

西軍の艦隊上陸す

是より先き西軍の艦隊背衝軍は七月廿五日佐渡の小木港に達し東軍の動靜を窺ふ時に新發田藩反覆して先づ降り西軍の先導たらんとすを請ふ因て西軍大夫濱より東軍の抗戦に遭はずし



水原方面  
敗る

て上陸し、新發田藩を嚮導として、一は新發田方面に、一は新潟に向ふ東軍は先きに新發田藩の質を出して二心なきを盟ひしを以て反覆の疑を解き、之を以て下越の守備を一任せしに、其西軍に内應せしと聞き、大に驚き、水原に在る會の衝鋒隊、結義隊が大に爲す有らんとせし計畧も、兵寡く地廣く、之を行ふと、能はず、唯守備を嚴にして敵を待つより外なきに至れり、而して七月廿七日、新發田方面に向へたる西軍は、一は笹岡、一は水原に進みたるを以て、東軍大に之と戦ひ、遂に支へずして退く、時に米澤の兵、荻島の渡口を扼守す、八月朔日、西軍曉を冒して之を襲ひ守兵殆と殲く、我將町野源之助、新津にありて其急を聞き、馳て荻島に至り、西軍を撃て之を却け、後村松に入る、笹岡の西軍は猶突進保田に至り、新津の西軍と合し、三日、村松城に迫り之を降らしめたりき、次で各方面の西軍、大舉加茂に於ける東軍の前後を衝かんとす、

荻島の戦

赤坂艸水の戦

是より先き、八月朔、西軍村松城を抜かんとするや、先づ三路より赤坂、艸水の壘に迫る、會將萱野右兵衛謀して之を知り、兵を山間に潜めて待つ、西軍の一軍山に沿ひ間道より赤坂に出てしが、忽ち此伏兵に遇ひ、大に亂れて敗走す、然れども西軍の別隊、村松城に迫りて之を降らしめたるを以て、即ち火を艸水村に放ちて、退きぬ、是より先き、新潟に於ける東軍は、守備を嚴にし、信濃川の險要に據り、砲壘を築くと無數、以て西軍の來るを待つ、七月廿六日、西軍艦隊と共に之を攻撃し、廿九日、に至り市街に入り、竟に全く占領す、米澤の將色部長門之に死す、東軍悉く輿板に走り、轉して加茂に至る、

新潟敗る

(廿七) 加茂の戦

是に於て、會の佐川等各方面より來れる東軍と加茂に據り、決死以て東西及び北方の三面より進入する西軍を力拒せんと、一は

佐川隊等  
加茂に據りて西軍

を拒ぐ

天神口に、一は上法内口に陣して、西軍を討つ、次て桑名の雷神隊は黒水口に、會津の衝鋒隊は村松口本道に、會將佐藤織之進は上法内口に來り援ふ、

下法内の戦

五日、西軍進みて佐藤隊に逼る、佐藤隊兵寡なくして守ると能はず、退きて下法内の關を守る、西軍勢に乗じ之を撃つ甚た急なり、東軍力拒奮戦毫も屈せず、西軍又天神口より加茂に逼らんと欲し、密に進入を謀る、東軍寡兵利あらず、適く佐川隊赴き援け、兵氣

天神口の戦

爲に震ひ、戰夜に至りて已まず、時に警あり、曰く、西軍村松より我後を襲ひ、一軍を黒水に向はしむと、是に於て東軍大に驚き、皆曰く、黒水にして敵の占むる所と爲れば、則ち我兵は釜中の魚たるのみ、若かず、會津に退きて、再舉を謀らんには、と因て全軍俄に黒水に退く、次て會桑等の兵津川に退く、此時に當り、枋尾方面の東軍は、會津の國境八十里越に退き、鞍懸山の險を扼し、村松方面の

東軍黒水に據る

東軍津川

方面に西軍を拒ぐ

東軍は、會津領越後津川を根據として、本道赤谷口及び間道沼越口を扼せり、而して會將佐川意を決し、進て新發田を屠らんと欲せしが、此時長岡の軍は、主將を喪ひて、兵氣振はず、米澤の兵遂に利あらざるを慮かり、陣を撤して本國に還りたるを以て、會兵孤立進撃する能はざるに至れり、偶佐川執政と爲るを以て、町野源之助其後を承く、

(廿八) 津川方面の戦

沼越口猿滑の戦

八月十四日、八十里越の西軍、上田、松本の兵は、道路險惡、東軍備堅からざるを知り、突進猛撃會津只見村に達せり、津川の間道、沼越口の西軍、長州、越前の兵は、此日猿滑の險に迫り來る、東軍之を逆撃して卻く、津川新發田間の本道なる赤谷口の西軍、親衛兵、及び長州、加州、藝州、新發田の兵は、十五日を以て本道及び其左右の間道より進み、十六日の天明角石原に來る、東軍の銃手及槍隊此地

赤谷口角石の戦

東軍津川に據る

を扼して拒ぎ戦ふ時に雷雨驟に至り、四面冥濛咫尺を辨せず、加ふるに道路狹隘、加治川の急流に沿ひて屈回せるを以て、彼我暗中に闘ひ、短兵接刃すること數刻、我兵奮闘將に西軍を敗らんとせしに、適く西軍の一隊不意に我左側を衝く、我兵驚き逡巡す、會將遊撃隊長番頭三宅小左衛門大に怒り、大喝士卒を勵し、挺身して進む、忽ち飛丸に中りて斃る、時に年四十六、西軍機に乗して進む、左右翼間道の西軍亦我兵を破りて赤谷に合す、此時本道間道の東軍皆津川に退く、小左衛門の長子を九七郎と云ふ、年十八、亦北越の軍に従ひ、五月越後杉澤の戦に討死し、二子初次郎、父小兵衛は、九月に至り、城中に戦没す、一家四人皆國事に死す、悲酸と云ふべし、而して會津士皆此類にして、今指を屈するに暇あるべし、

十六日、西軍本道を進み、諸要地を占領して阿賀河畔に至る、河の南岸は即ち津川驛なり、東軍之に據り河を隔て、拒ぐ、西軍勢に乗じ急に河を渡らんとす、然れども水深く且つ船舶なきを以て、

五十島の戦

火力に因て我軍を退けんと欲し、烈しく銃砲を發す、東軍險隘を扼して、之に應じ、力拒屈せず、時に日已に哺するを以て、西軍は退きて柳清水、及び諏訪嶺に陣し、東軍は津川谷澤の間に於て河に沿ひ、堡壘を築きて益々守備を嚴にす、已にして西軍亦山腹及び河岸に沿ふて壘を築く、是より兩軍晝夜奮闘、砲聲連日絶たず、而して西軍此要害に支へられて遂に東軍を撃破して、前進する能はざるなり、

時に津川諸隊、塙咽防禦に餘りあるを以て、町野隊并附屬隊は石間より入る西軍を防んど、谷澤に至り進て五十島村に入る、十八日、未明西軍岩屋村の前岸より發砲頗る劇し、偶々砲兵隊結義隊來會す、乃應戰數時數人を斃す、西軍退く、時に軍事局一兵を馳せて曰く、敵吉津に入り火を放ち後路將に斷絶せんとす、宜く速に兵を退くべしと、既にいて吉津近旁に至れば、敵の一兵を見ず、始

て其虚報なるを知る、軍中傳へて以て笑柄とす、軍事務局員田中某之が爲に罰せらる。

此時に當り、我藩公亦越後口白河口東西の國境甚た切迫せるを以て、野澤の本營を徹して會津城に入り、四方の防備に汲々たり是より溯りて白河口戦闘を記し、次て會津の籠城に及ばん、

(廿九) 白河口の戦

是より先き、王師東征徳川氏恭順するや、朝廷、東山、東海兩道の先鋒總督を罷め、鎮臺を江戸に置き、大總督熾仁親王之を管し、更に岩倉具定卿を以て奥羽征討白河口總督となす、尋て具定卿其職を辭せしを以て、鷲尾隆聚卿之に代り、先づ薩長の別軍、及び大垣忍の兵をして白河口に向はしむ、此西軍、閏四月十五日、宇都宮より太田原に出て、漸く白河に進まんとす、此時は即ち我會津藩は薩長を攘はんとせし伏見の一舉、圖らず天聽を驚かし奉りたる

西軍白河口に向ふ

を深く恐懼し、或は諸侯に頼り、或は家臣をして、謝罪恭順に周旋奔走せしめしと雖も、西軍の勢、方に熾にして、東西兩國の間梗塞し、事情更に通せず、我熱誠天朝に達する能はず、仙臺、米澤、二本松等の諸藩は、已に西軍の命を以て、我國境の東北面に進撃するに至り、我藩は一時止むなく之に應戦せしも、固より王師に抗するの意あるにあらざれば、使を之等の諸藩に遣はし、恭順の周旋を依頼せるに、其諸藩は戦を中止し、仙臺方面の西軍に至りて、恭順を容るゝを謀るも許されず、却て我藩に應じて其孤忠苦節を援はんとせし時なり、然れども、奥羽同盟論未だ起らざるや、仙臺二本松の兩藩、督府より出兵を促され、軍を出して白河城を守備し、以て此時に至れり、  
抑白河は、阿武隈河上流の右岸にあり、西は勢至堂の險を経て、若松に通じ、八里程、東は棚倉の城市を過ぎて、平に達し、二十里、北は須

白河の要害

會兵白河  
城に據る

皮籠原の  
戦

賀川郡山本宮二本松福島等の驛市を経て仙臺及び米澤に通じ、  
 而して南宇都宮方面より白河驛に進入するには其本道は白坂、  
 右方は旗宿、左方は黒川口の三路あり、故に白河は奥羽南面の咽  
 喉を扼する形勝を占め、實に會津第一の關門たり、  
 是に於て會津は哀訴歎願の無益なるを知り、先づ兵を遣はして  
 之に據て、以て西軍を拒かんと、田中佐内に兵三百を與へ、舊幕府  
 の兵と共に勢至堂口より白河に向はしむ、閏四月二十日、田中等  
 白河に至れば、奥羽同盟略成り、仙臺以下の諸藩兵、會津を援け共  
 に白河城を守れり、  
 太田原口の西軍白河陥ると聞き、廿一日、太田原を發し、行々東軍  
 と鹽崎、油井關屋に戰克ち、廿四日、蘆野に達し、廿五日、白坂を過ぎ  
 皮籠原に至る、此地、白河城を距ると一里許、會の遊撃隊、遠山伊右  
 衛門等、保壘を築き之を守る、西軍之を攻撃すると激烈なりと雖

も、我兵驍勇、拂曉より日中に至り、猶勝つ能はず、會兵乃ち山上に  
 據りて劇射し、兵氣益奮勵す、而して別隊をして左翼より迂回し  
 て敵背を衝かしむ、西軍狼狽、白坂に走り、遂に蘆野に退く、此時西  
 軍は宇都宮を根據となし、薩將伊地知正治、此處に在りて戰畧を  
 劃策し、今市には土將板垣退助、在陣して日光方面を守備せり、會  
 將山川大藏、田中藏人、幕將大鳥圭介、沼間慎一郎、守二、松浦巳三郎  
 等は、閏四月廿一日、不意に今市の土軍を撃ちしが、遂に抜く能は  
 ざりき、然れども土軍難戰苦闘、將士の死傷甚た多しと云ふ、  
今市の戦は卷七に載せしむ、白河の戦に關連するを以て茲に再出せり

抑今市は、北方、會津、日光兩街道を扼する咽喉にして、南方、壬生、宇  
 都宮に通ずる門戸なり、之を以て、東軍は猶日光方面に出沒して、  
 再ひ今市を攻撃し、進んで宇都宮を恢復せんとす、適く白河口西  
 軍の敗報、宇都宮に達せしを以て、薩將伊地知、宇都宮の守備を土

西軍後援  
を得て再  
び白河に  
進む

藩に囑し、自ら薩長垣の別軍を率ゐて白河に向ふ、而して白河の  
敗報江戸に至るを以て、因州備前大村柳川佐土原等の藩兵來り  
援ふ、已にして蘆野の西軍は、宇都宮の援と合し、進んで白河に向  
ふ、本道は薩長垣忍の四藩、旗宿口は薩長垣の三藩、黒川口は薩長  
の兩藩の兵にして、總軍合せて千七百餘人、大砲七門なり、東軍亦  
之を聞き、募兵を中央に、會將小森一貫齋隊、遠山伊右衛門隊、一柳  
四郎左衛門隊、鈴木作右衛門隊、梶原悌之助隊等は右翼に、仙臺棚  
倉は左翼に分れて敵の進軍を待つ、總軍凡そ二千餘人、大砲八門  
を備ふ、

白河城陥  
落

五月朔、天明、兩軍の兵城外の原頭に戦端を開く、西軍本道間道の  
四道より進撃す、我軍亦正面及び左右の丘陵上に展開し、散兵先  
づ銃を發し、繼で砲兵戦線に入り、兩軍力を供せて角拒す、旌旗地  
に蟠まり、礮聲天に震ふ、其苦闘搏戰の時に當りては、勢山岳を傾

會津士の  
戦死者

け、色風雲を變せんとす、而して勝敗未だ決せざるなり、本道の西  
軍頗る慄健、我中央の募兵少しく退く、西軍機に乗じて愈々奮ふ、  
巨礮の聲、雷霆擊雷轟に異ならず、砲火天に閃き、烟烟空を蔽ふ、東軍  
の中央殆ど剥脱し、從て兩翼も亦漸く退く、西軍乃ち總進撃に移  
り、先づ右方丘陵上の我兵に迫る、我士卒忿激城南の山上に拒ぎ  
て之を斥く、已にして本道及び左右翼の西軍、東軍の左側に逼る、  
是に於て、仙臺棚倉の兵、殆ど挾撃を受けて退かざるを得ざるに  
至る、東軍の全隊乃ち支ふると能はずして去る、白河城遂に西軍  
に歸す、此日、仙臺兵新たに來り、其兵衆くして戦闘に練熟せず、終  
に此敗を取りしと云ふ、

此日は、拂曉より正午に至れる大激戦にして、殊に會津の關門な  
るを以て、我會士皆死守奮闘し、朱雀寄合隊長一柳四郎左衛門、朱  
雀足輕隊長日向茂太郎を始めとして、會の士卒の戦死せるもの

二百餘名、今食祿百石以上の將士の戦死せる者のみにても左の如し、

百石	池上新兵衛	百五十石	飯田初次郎
千三百石	横山主税	二百石	林次郎
百五十石	井深徳次郎	百五十石	春日曾右衛門
百石	磯上秀次郎	三百石	唐木定之進
百三十石	小原巖	百石	上田源之丞
百五十石	小川實之助	百三十石	伊東左藏
百石	伊東八三郎	百五十石	牧原勘三郎
二百五十石	和田八十之助	百石	加藤左一郎
三百石	赤羽衛門	百五十石	錫柄義衛
百石	志賀勘助	百二十石	鈴木覺彌
百石	海老名衛門	百石	矢島儀右衛門
三百石	日向造酒	百五十石	二木理助
四百石	日向茂太郎	四百石	小松十太夫
四百石	一柳四郎左衛門		

西軍白河城を守る

東軍已に白河城を退きしと雖ども直に之を回復せんと欲し其道路諸方に通ずるを以て、各方面より襲撃する殆ど間斷なく、大に西軍を困ましむ、蓋し西軍此地を占むれば直ちに勢至堂口より會津に進入し得べきを以て、我藩は益々磐城及び仙道諸藩に屬して、西軍を他方に牽肘せしむ、西軍は監守兵を勢至堂口に置き、先づ奥羽列藩を破らんと欲すと雖も、兵數寡く且つ左右皆東軍の出没するを以て、未だ長驅深入すると能はず、唯日夜斥候兵を諸路に出して警戒を嚴にし、以て後援の至るを待つのみ、五月二日、白河城已に陥りたるを以て、東軍千餘人、三斗小屋口に集り、太田原の虚を襲ふて、白河宇都宮の間を遮斷し、白河兵の歸路を絶たんと欲し、猛進太田原を占領せしも、宇都宮白河の兩軍夾撃せんとすと聞き、三斗小屋に退きて、會津の東南面の國境を警戒せり、三斗小屋口は會津より白河及び太田原に通ずる間道

なり、

先きに今市を攻撃して志を得ざりし東軍は、宇都宮方面の虚を衝かんと力を蓄へ、勢を養ひ、五月六日、再び今市に進入す、兵凡そ千餘人、其銳鋒當るべからず、土軍苦戰纔に之を斥けたり、是に於て其東軍退きて藤原に屯し、三斗小屋口と相並て會津の國境を固守す、已にして土軍は多く白河方面に進み、肥前の兵二千餘人之に代りて今市方面を守備し、遂に進みて藤原の我軍に迫る、我東軍の大砲隊長山川大藏、歩兵隊長大鳥圭介、草風隊長村上求馬、二百餘兵を指揮し、中軍及び雙翼を以て奮戦し、遂に之を撃破し、敵砲アームストーンを奪へり、此後西軍屢々來襲するも竟に克つ能はざりき、

會兵屢々  
白河城に  
進撃す

此時に當り、白河城は西軍以て根據となし、更に守備を弛めず警戒を嚴にして、後援の大兵至るを俟ちしが、宇都宮方面の西軍漸

く來り會せり、而して我會兵は精銳を盡して必ず之を覆し、突進猛撃西軍をして一步も奥羽の地に入らしむ可からずと、諸隊皆奮激、白河附近に出没して其恢復を謀れり、

五月廿七日、我青龍三番足輕、蜷川友次郎隊は白河太平口に砲兵高橋權太夫隊、會義野田進隊は白河大谷地に進撃して、西軍と血戦し、遂に城を抜く能はずして退く、此日容保公の世子喜徳公は白虎砲兵の兩隊を率ゐて安積郡三代に至り、白河口の聲援をなせり、

六月十二日、我朱雀三番上田八郎右衛門隊は太平口に、正奇隊及び會義隊は古天神に、新練土屋鐵之助隊は赤髭山に、遊撃遠山伊右衛門隊は和田山に、再び西軍と戦ひ、遠山伊右衛門、山田貢、山寺彦作、小松族等の諸將之に死せり、

六月廿六日、一番砲兵小原宇右衛門隊は白河六段山に、西軍と戦



ひ、遠山富次郎、坂本宇兵衛等の諸將之に死せり、  
其他六月十五日、新練隊は白河雷神山に、七月朔日、原田主馬隊、新  
練隊は白河戸の内附近に、七月三日、野田隊は白河大谷畔に、西軍  
と接戦せしが、竟に白河城を恢復する能はざりき、

(三十) 棚倉の戦

六月廿三日、白川の西軍棚倉に來り迫る、是より先き西軍の參謀、  
板垣の土軍を率ゐて白河に入るや、以爲らく、坐して東軍の來襲  
を待たんよりは進て棚倉を取らんにはと、之を薩長兩軍に謀る、  
皆曰く、寡兵爲すあるに足らず、請ふ援兵の至るを待たん、と後援  
を江戸に乞ふ、軍務官報じて曰く、既に兵を海路より派し、平、棚倉、  
三春、二本松を下さんとす、是等の軍と相議し、奥羽列藩を平げ、會  
津をして孤立せしめ、然る後之を討ずべし、陸路も亦別に兵を送  
らんと、已にして因州、備州、柳川、佐土原等諸藩の兵前後來り加は

西軍の援  
兵海陸兩  
道より來

棚倉城陷  
落

り、又薩州、川越、阿波等の兵は、海路より平潟港に上陸せり、乃ち白  
河の軍は海路の軍に先ちて棚倉を抜かんと、六月廿三日、進撃の  
部署を定め、廿四日、各所の我兵と戦ひ、三道より棚倉城に逼る、是  
に於て我會將武井寛平、木村兵庫等、奥羽同盟軍と合し、伏を山間  
に置き、西軍を來撃せしが、衆寡敵せず、城に退き、猛奮城外の關門  
に拒き戦ふ、然れども遂に守るへからざるを以て、城を燒きて平  
城に退く、此日、西軍大垣の兵を棚倉に留め、其他は進んで平城に  
逼る、平潟の海道軍亦同時に平に進む、

(卅一) 平の戦

廿八日、西軍和泉城を攻めて之を拔き、廿九日、富岡城を陥れ、突進  
平城長橋門に迫り來る、東軍力戦日暮之を卻く、七月朔、西軍大舉  
進撃す、東軍激戦苦闘の後亦之を走らす、此時に當り、東軍即ち會  
津、仙臺、中村及び幕兵等、平城の長橋、不明、才植の三門を固守し、砲

和泉富岡  
の諸城敗  
る  
東軍平城  
を固守す

土將板垣  
牧野等軍  
を督勵す

東軍平城  
に西軍を  
擊退す

臺を城外御廐村に築き、又數重の壘を高坂村に築き、防禦最も嚴重に、兵威大に振ふ、是に於て、西軍の諸將會議して曰く、蕞爾たる此孤城の爲め、日を曠くして、抜く能はざるものは、實に西軍の柔弱なるに因らざるを得んや、會津を席卷せんと欲するの我軍、斯の如くにして、何の時か平定の功を奏せん、宜しく死を決して戦ふべし、と土藩の將板垣退助は、牧野群馬と共に來りて軍を督勵せり、

十三日、西軍三道より進みて來り迫る、東軍乃ち壘に倚りて逆撃し、大に西軍を苦しむ、西軍漸々後援加はり、其勢甚た鋭し、我軍衆寡敵せず、遂に城外の關門に退く、適く雷鳴驟雨、我東軍の砲銃多く舊制にして火薬濕り、射撃する能はず、西軍機に乗じて進む、之に因り東軍徐かに隊を整ひ、悉く城内に據り、銃を捨て刀を揮ひ、決死以て、更に屈する色なく、拒戦甚た力め、遂に西軍を擊退す、西

東軍夜城  
中を出て  
て退く

會將丹羽  
新吾白河  
を襲ふて  
戦死す

東軍須賀  
川驛に據  
る

西軍三春  
進撃の戦  
客

軍乃ち其俄に抜き難きを以て、日暮城外の要地に露營せり、然れども東軍、城中糧糧硝薬の準備少く、長く保守し難きを知り、其夜三鼓、火を城に放ちて、會津及仙臺方面に退去す、

(卅二) 東軍白河を襲ふ

七月十五日、東軍、會津、仙臺の兩道より進んで白河に逼り、之を抜かんとす、薩長、土垣の兵之を拒ぎ、兩軍の銃砲千電万雷の如し、東軍遂に退く、此時會の大砲隊長丹羽新吾等戦死せり、次て東軍淺川村の兩軍を襲ひ、棚倉を回復せんとす、克たず、此時東軍の大兵は須賀川に據り、壘を築きて白河、棚倉の西軍に備へ、屢兵を縱て西軍の隙を窺ふ、是に於て、白河の西軍、須賀川を攻撃せんと聲言して之れを牽制し、棚倉及び海道の西軍は、蓬田と新町より進んで不意に三春を襲ふて之を陥れ、進んで二本松を取らんとす、之れ須賀川方面の東軍をして、戦はずして走らしめんとす、戦畧な

り、

(卅三) 三春藩降伏

土將板垣三春に突進す  
守山藩降伏  
三春藩士河野廣中恭順論に奔走す  
三春藩降伏

廿四日、棚倉の西軍板垣自ら之を率ゐ、石川に至りて少數の兵を  
残し、以て須賀川方面の我軍に向つて虚勢を張らしむ、我軍遂に  
之を覺らず備を嚴にして對陣す、而して敵の本隊は廿五日、迂回  
して蓬田に至り、露營せり、是より先き蓬田は我東軍の守備せし  
所なりしが、此日、新町方面に向ひて海道の西軍進むと聞き、皆新  
町に赴援して一兵を留めざりき、而して又蓬田三春間の要衝に  
當る、我守山藩は力の敵すべからざるを知り、已に降を乞ふて西  
軍に附けり、之を以て、廿六日、遂に西軍の將板垣等三春に達す、三  
春藩士河野廣中等、恭順説を以て藩論を回し、戦はずして亦降旗  
を建つ、是に於て、其藩老秋田主税、荒木國之助、小野寺舍人等、幼主  
秋田万之助と共に、軍門に降り西軍に付く、

(卅四) 本宮の戦

東軍本宮を固守す  
土軍斷金隊長を仆す

廿七日、東軍三春落城と聞き、本宮及び二本松を守備せり、土、薩、垣、  
忍、館林、黒羽、彦根等の西軍、先づ本宮を取らんと、進んで阿武隈河  
畔に至る、東軍乃ち川を隔て、防戦す、西軍船に乗じて河を渡り、  
東軍に當る、東軍奮闘劇射、土軍斷金隊長美正貫一郎が、中流にし  
て其士卒の逡巡を叱咤するを狙撃して之を仆す、此時其士卒憤  
激死を決して進み、別隊と共に上陸す、東軍遂に支へずして退く、  
是より先き、我朱雀三番上田八郎右衛門隊は、白河附近羽太村に  
據り、白河より會津に至る間道を扼守せしが、土藩の將谷守部干  
城、國に歸りて援兵を率ゐ來り、白河の西軍と合し、羽太村に突出  
するに會し、遂に敵せず退きて湯本方面の險を守備せり、時に勢  
至堂口、滑川附近には、我一番砲兵隊等駐軍して白河方面を警戒  
せしが、本宮敗れ、二本松危急なりと聞き、此方面の守備を勢至堂

白河附近の戦

東軍本宮を襲ふ

の東軍に一任し、其守地を徹して、御靈櫃に至り守衛せり、勢至堂及び滑川は、白河より會津に入るの本道にして、御靈櫃は本宮より會津に至るの間道なり、  
廿八日、天明、東軍、會津、白河の兩道より本宮を襲ふ、西軍頗る苦戦、土軍の諸隊來り援ひ、遂に東軍を斥け、進んで高倉村の壘に逼りて之を抜く、

(卅五) 一本松城陥落

西軍二本松に進撃す  
市街の接戦

廿九日、薩土の西軍及び諸藩の兵、勝に乗じて一は三春を發して小濱より、一は本宮を發して本道より、二本松に向ふ、東軍は小濱より來る西軍を阿武隈河岸に壘を築きて扼し、又本道より進める西軍を正法寺村に防ぎ、兩軍の大小砲山谷に轟き、喊聲激流に響く、已にして西軍正法寺を破て市端に進む、因て東軍街口の大壇を扼し、山に沿ひて柵を聯ね、林に伏して亂射し、彈丸雨の如く、

藩侯米澤に去る  
藩士の殉難

硝煙雲の如し、先鋒の薩軍斃るゝもの算なし、之に因て土垣等の後援、益加はり、短兵相接し、銃を揮ひ刀を舞はし、相搏ち相戦ふ、時に小濱口の西軍亦河を渡りて進撃し、河岸の砲壘を占領して直に市街に突入し、本道の兵進て之と合し、次で一軍は正面に進み、一軍は左翼となり、山を踰えて城後に出で、一軍は右翼となり以て齊しく城に迫る、此時亦長州の兵、海道の兵と共に、小濱口より馳せ來りて加はり、勢猛虎の如し、東軍亦山上に據り、林中に潛み、西軍を亂射せしも、遂に支へず退きて城と存亡を共にせんと欲し、固く守る、而して竊に兵を民家に伏して、西軍の不意を襲ふ、然れども事の遂に爲すべからざるを知り、城主丹羽長國、一方を開きて米澤に至る、其臣丹羽一學、内藤四郎兵衛、服部久左衛門、丹羽新十郎、丹羽傳十郎、丹羽和左衛門、安部井又之丞、千賀孫右衛門の七人、城中に自殺して國難に殉じ、千賀孫右衛門の家族亦皆節に

會兵の奮戦

死せり、餘兵遂に城に火を放ちて退く、此日、會將櫻井彌一、右衛門、朱雀隊を率ゐて南日光口より此地に轉じ、井深兵之進亦猪苗代隊を率ゐて血戦し、我藩士卒の死するもの四十餘人、傷つく者亦多し、其戦死者大略左の如し、

朱雀足輕櫻井隊長

- 小笠原主膳
- 小川留五郎
- 小山輔樹
- 小山源之助
- 渡邊萬治
- 渡部崋治
- 川野市太郎
- 古川喜一
- 神尾源太
- 永峯長之助
- 成澤友記
- 村山鏡之助
- 寺南山泰助
- 外井幸次郎
- 山口新之助

- 安部友之助
- 慶徳久太郎
- 盛田常彌
- 鈴木傳四郎
- 杉原留四郎
- 菅井道之助
- 小松治三郎
- 赤塚惣吾
- 穴澤茂
- 佐藤春的
- 佐々木慶次郎
- 坂下榮
- 菊地織江
- 東海林留四郎
- 伊藤寅吉

(卅六) 相馬方面の戦

相馬中村降る

東軍駒嶺に據る

駒嶺方面の激戦

東軍駒嶺を引上げ

時に薩長、兩筑、肥後、伊賀の西軍は、海道を進て相馬中村城を降し、此兵を嚮導となし、將に仙臺方面に向はんとす、是に於て、東軍死力を盡して駒嶺に壘を築き、之を待つ、時に二本松にある西軍も、彦根、備前、柳川等の援兵を得、一團となりて亦將に福島に進撃せんとす、八月八日、北海道の西軍は駒嶺を衝かんと、先づ黒木村に進み、駒嶺の東軍と交戦し、十一日、兩軍互に左右翼を縦て進み、西軍の右方は原籠の東軍に迫り、左方は椎木に開戦す、東軍猛進、原籠の敵を破りて之を追ふ、時に椎木の戦亦激烈にして西軍大に苦戦せしが、若干隊を迂回して我背後に出て、火を寺院に放つ、東軍相顧みて色動く、正面の西軍機に乗して進む、東軍遂に駒嶺を引上げ、原籠口の東軍、之を以て亦退かざるを得ざるに至れり、

東軍駒嶺を襲ふ

十六日、東軍數百人、新池街道より駒嶺の壘を襲ひ、奮戰將に之を抜かんとせしが、西軍の援兵益加はり、遂に取る能はず、廿日拂曉、東軍大舉再び之を襲ひしも亦抜く能はず、海岸に沿ふて退きたり、

(卅七) 東西兩軍の形勢

同盟諸藩の士氣振はず

白河城、西軍の根據となりしより、此方面の東軍連戰連敗、同盟の諸藩士氣萎靡して、決死西軍に當らんとするものなく、動もすれば戟を投じ、銃を棄て、軍門に降り、殊に甚しきは一彈を發せず、一劍を閃かさず、早くも城頭降旗の翩翩たるを見るに至る、獨り二本松に至りては、一藩の士舉て身命を挺し、同盟の義を重しとなし、鞠躬盡瘁、其城に、其家に、屠腹して、難に殉せるもの、城を出て家を出て、戰死以て國に報せしもの多きは、一藩の士氣未だ衰へざるを知るべきなり、

白河口の西軍は守勢を取る

越後口日光の形勢

此時、我會津は、西軍の勢日々に盛なるを見て、益白河口の要害を扼し、虚に乗じて、白河を回復せんとするも、西軍亦此地を根據となし、容易に守備を弛めず、然れども、西軍も亦二本松及び相馬方面の戰急なるを以て、此地より直ちに會津に進撃する能はず、僅に守勢をとりて、仙臺、米澤方面進畧の終るを待つのみ、此時、越後口は、我東軍一は津川に據り、一は八十里越方面の險要に據り、以て西軍を防ぎ、西軍は難戰苦闘、一步も進む能はず、而して日光口及び三斗小屋方面の會津の南境は、東軍の勢亦鋭く、屢西軍の來襲を卻け、兵勢餘りあるを以て、此方面の諸隊を分遣して、東方面に轉じ、本宮、二本松口の守備を嚴にせしめたり、

會津史 卷八終

明治三十年五月五日印刷  
明治三十年七月七日發行

正價金參拾五錢

著者

福島縣平民  
池内儀八

發行者

福島縣平民  
池内清治郎

印刷者

島保藏

印刷所

株式會社 秀英舍第一工場  
東京市牛込區市谷加賀町  
一丁目十二番地

一手販賣

岩代若松馬場下一ノ町

河野忠三郎

東京市神田區表神保町

東京堂

全

八尾新助

全 日本橋區通、壹丁目

大倉孫兵衛

全 京橋區元數寄屋町三丁目

信文堂本店

全 淺草區茅町二丁目

松成堂

全 京橋區南紺屋町

小川寅松

岩代若松一ノ町

信文堂

全

森萬作

全

齋藤八四郎

全

荒井書店

全 若松甲賀町

伊藤文華堂

全 若松大町

田中善平

全 若松七日町

博盛館

與羽其他各縣各地ノ書肆

特約大賣所

賣捌店



110  
合  
29



110  
A5  
29

書  
天  
人